

495-K i 46ㄅ

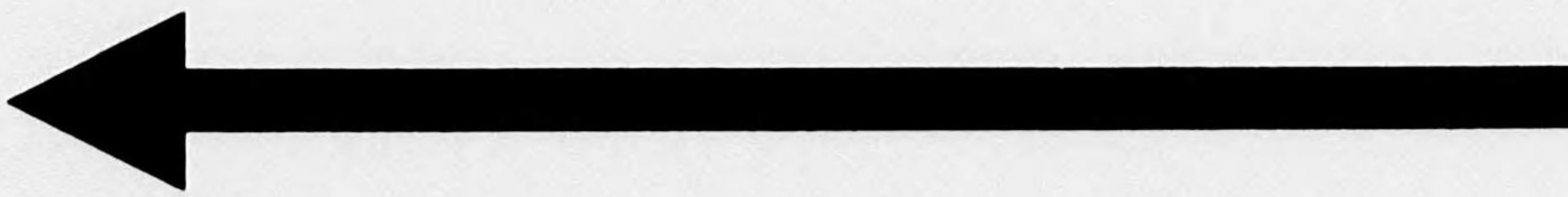


1200500744063

146



始



495
K46

產科婦人科讀本

醫學博士 木下正中著



A85

12

はしがき

入澤博士が内科讀本を、近藤博士が外科讀本を書かれるから、自分にも産科婦人科讀本を書いて見てくれぬかと希望せられた。先づどの程度にするがよいかと考えて、参考のために穂積博士の民法讀本を通讀して見たが、誠によく要領を得て居つて、その上に簡明であり、平易であつて、理會に苦しむ法學の事柄を誰にも了解させるようにすらすらと述べられて居る。とてもその眞似は出来ぬことは云うまでもないが、求めに應じて筆を執つて見ようと考へた。然し産科婦人科は醫學の中でも殊に性の問題に關係のあることが多いものの一つであるから、立ち入つて述べ難いところもあり、靴を隔てる感みが少くないために、自然に筆の先きが溢り勝ちではあろうが、出来るだけ平易に書いて見るようにしたい。殊に簡單を旨とするものであるから、學理や學說のことには餘り立ち入らぬことにする。今一つは本篇の用語は讀者の了解せられ易いようにするために、なるべく俗間の用語を用いることに努めたから、或は卑猥に聞えることが多いと思はれ

る。また同じ考えから漢字を用いずに假名を用いたところが少くないが、これ等は豫め宥恕を願うて置くことである。若し出来上つたものが少しでも読者の参考になつて、婦人の健康増進の助けになるとてもあれば大きな幸である。

昭和九年八月

木下正中

目次

男女の區別	一
男女—性器—夫婦—骨盤	
産科の領分	二
妊娠	
婦人科の領分	四
婦人科	
骨盤	四
骨盤—骨盤の任務	
女子の性器	六
女性性器—外阴—處女膜—陰瘻—陰—子宮口—子宮頸管—子宮體腔—卵管—卵巢	
月經	九
月經—月經の周期—月經の初潮—月經時の容態—月經の異常	

排卵

排卵—卵子の輸送

三

妊娠

妊娠の成立—受精卵の着床—つわり—胎児の養分—胎児の不要分—下肢の血管の膨れ—
乳房—初乳—まくり—胎盤—臍緒—胎水—胎盤の作用—胎児の胎内の
位置—胎水の作用—胎児の心音—妊娠中の攝生—食事—特別な栄養品—便通—下
痢—尿通—着類—いわた帯—寝具—運動と労作—散歩—體操—旅行
—皮膚—入浴—下り物—睡眠—胎教—乳房—性交—妊娠の持續期間
—成熟した胎児—遺傳—受胎の期間—妊娠の診定

三

出産の準備

産婆—醫師—出産の準備—産室—照明—暖房

元

出産

出産—出産のしるし—陣痛—腹壓—破水—後産の出産—出産時の出血—後
陣痛—新生児の處置—臍緒—入浴—點眼—着衣—正期産—晚期産—流産
—早産—未熟産—正常産—異常産—自然産—人工産—出産の難易—妊娠中に起
る異常な容態—つわり—流産—四ヶ月までの流産—流産の完全と不完全—習慣流産—
胎狀鬼胎—子宮外妊娠—妊娠子宮の後屈—蛋白尿—腎臟炎—脚氣—新生児の胸氣

四

多胎妊娠

—徽毒—淋疾—妊娠中に起る病氣—産兒制限—人工流産—傳染病—心臓・肺・肋
膜の病氣等—外科手術—外傷—胎児の發育不全—畸形—臍緒の異常—羊水過多症
—前置胎盤—正常位置胎盤の早期剝離—妊娠中の出血—病産—子痲—陣痛—
腹壓の強弱—眠り腰—婦人の體育—運動の方法—骨盤の廣狹—切開分娩—骨盤の測定
—子宮破裂—胎児の骨盤の中の通り方(胎児の位置)—頭産—逆産—橫産—破水
の時期—臍緒の異常—出産の全經過の時間—成熟した新産兒—早産兒—出産の終了—
出産時の出血

九

多胎妊娠—雙胎

産褥

産褥—褥婦—後陣痛—惡露—子宮の縮小—乳汁分泌—初乳—褥婦の休息—
食争—運動—床離れ—體操—便通—尿通—着類—入浴—家事
—讀書—旅行—産褥熱—檢温—檢脈—産後の月經—産後の障り

九七

新産兒

新産兒の處置—入浴—着類—襁褓—尿通・便通—新産兒の外出—空氣・日光・運
動—栄養—授乳—授乳の時間—牛乳と乳製品—乳母—授乳前の注意—睡眠
—温保—小兒の發育の良否—乳齒—乳離れ—飢餓熱又は渴熱—妊娠し得る年齢

二五

婦人病

婦人病——婦人科——婦人病の診察を受けるには——婦人病の容態——月経——初潮——周期——續く日数——分量——性質——月経時の容態——月経と性器——月経時の痛生——月経の終絶——更年期——月経の異常——月経以外の出血——痛み——腫れ物——性生活に關した容態——性質——内分泌腺——性腺——卵巣の内分泌——腺療法——ホルモン療法

性器の發育異常

性器の發育異常——外陰の發育不全——無毛症——鎖陰——造陰術——腫瘍——子宮の發育不全——その他の發育異常——卵巣の發育不全——卵管の發育不全——月経異常と性器の發育異常——性感の異常と性器の發育異常

外陰の病氣

外陰の病氣——尿道口——外陰炎——外陰の癢痒症——ただれ——象皮病——雞冠のような發し物——瘻

腔の病氣

腔炎——女兒腔炎——負傷——瘻

子宮の病氣

子宮の位置——異常位置——子宮後屈——強い前屈——子宮脱——子宮内膜炎——慢性子宮症——子宮頸管カタル——子宮萎縮症

子宮の瘤

子宮筋腫——子宮腺筋症——子宮癌腫——子宮肉腫——悪性絨毛上皮腫——不正な出血のあつた時

卵管の病氣

卵管炎——癌腫

卵巣の病氣

排卵——卵巣炎——慢性卵巣炎——卵巣痛——卵巣萎縮——卵巣乳嚢腫——癌腫——肉腫——卵巣纖維腫——血管内被細胞腫——副卵巣萎縮

子宮周圍に起る病氣

子宮周圍炎

骨盤腹膜の病氣

子宮外膜炎——骨盤腹膜炎

尿路の病氣

尿道炎——腫物——膀胱炎——腎盂炎——結石——血尿——痛腫等——膀胱鏡

女子の淋疾

傳染——傳染の豫防——尿道炎——膀胱炎——外陰炎——腔炎——子宮頸管の淋疾——卵管炎——卵巣炎——腹膜炎——治療

不妊症

不妊症—原因—卵子—性器の發育不全—受胎の妨げ—性交不能—子宮の位置異常—
—受胎卵着牀の妨げ—子宮内膜炎—血液の病氣—體質の異常—精神病—鎖陰—性
感の異常—兩性に於ける不妊の原因の割合—受胎期—人工受胎法

二四

避妊

避妊—避妊の方法—受胎調節—禁慾

三五

妊娠中絶

妊娠中絶—墮胎

三六

婦人病の容態

帶下—腫には自淨作用がある—月經の異常—周期—持續日數—分量—無月經—
—月經時の苦痛—不正子宮出血—痛み—性感—尿通の異常—便通の異常—便秘の
習慣—その他の容態

三六

婦人病の診察

婦人病の診察—診察を受ける病人の心得—陰鏡—特殊な診察法—肛門からの診察—エ
ックス線を用いる診察

三七

婦人病の治療

三九

結

三〇

婦人病の治療—藥劑療法—腫洗滌—子宮内洗—巻法—水治法—坐浴—脚浴—雨浴
—電氣療法—日光—太陽燈—放射線療法—按摩—體操—運動—臟器療法—精神療法—
—手術療法—麻酔—安靜

産科婦人科讀本

産科婦人科讀本

醫學博士 木下正中

男女の區別

人間には男と女とある。その男が女になつたり、女が男になつたと云うことはないのが常である。さすれば男が人であると云えば女は人ではないと云わねばならず、女が人であると云えば男は人ではないと云わねばならぬことになる。分り切つたことのようにあるが面倒なものである。何故にそのようなことを考える必要があるかと云うに、男女は全く同じではないからである。他の身體の部分は略々同じでも**性器**は全く異なつて居る。それであるから男女は配偶して夫婦になつたとき



性器
夫婦

男女の區別

骨盤



に、始めて人間の單位になつたものであると云うことが出来る。
その性器に兩性の差異のあることが**人類繁殖**と云う大切な事を遂げるために必要であることは誰も知つて居る。従つてこの大切な性器の大部分は腰に在る骨盤の骨の管から成る城廓の中に安全に守護せられて居るのである。それは脳髓が堅固な頭骨の中に包まれて保護せられ、肺臓や心臓が胸廓の中に守られて居るのと全く同様である。この組立を見ても如何に人類繁殖と云うことが大切に取扱われて居るかと云うことが明かに分るのである。

産科の領分

妊娠

この人類繁殖のためには**妊娠**と云うことが起るものである。その妊娠から出産に至るまでと、産後と生れた新産兒とを手當をしたり、世話をして、出来るだけ安全に経過するように研究工夫することが産科

の領分に屬するものである。

妊娠は夫婦の間には普通起るべきものであり、病氣ではないが、随分性質の悪い早く成長する瘤でも妊娠のときのように速かに成長するものはない位、迅速に育つものであり、母親の方から云えば妊娠中は自分と胎兒と二人前の養分を取る必要があり、二人前の不要なものを取棄てねばならぬ必要があるから、二人前の働きをするために苦勞をせねばならぬ。そのみならず、出産のときには大きな痛みに堪えてそれを終らねばならぬのであり、産後には外からは見えぬが、大きな傷が子宮の中に胞衣の剝れた跡に出来て、怪我人のような状況であり、その時から後は嬰兒に授乳せねばならぬのであつて、前後約二十ヶ月は直接に妊娠に伴うた作業がある。この間は母親の身體は自分だけのものでなく、その健康と否とは嬰兒にも重大な影響を及ぼすものであるから、妊娠中や産後は病氣と同じ位、或はそれ以上に注意して、病氣の起らぬようにし、若し病氣の起つたときにはそれを軽い中に治さ

ねばならぬ。それ等のことを取扱うものが主に産科の領分である。

婦人科の領分

婦人科

婦人科と稱えて居るのは通例婦人の性器に起る病氣や瘤や傷などの治療をしたり、豫防をしたりするものであるが、性器に發育の異常があるときなどにその治療をすることもあり、配偶のある婦人が妊娠せぬときなどにも診療をする。泌尿器に屬する膀胱・尿道などは性器と近接して居るものであり、その上同時に病氣に罹ることもあるために婦人科で同時に扱うて居る。従つて腎臓の病氣なども婦人科で診療することがある。

骨盤

骨盤

上述の通りに性器を擁護するためには骨盤の骨管がある。骨盤は兩側の薦骨と後方に在る薦骨とて出來て居り、前方では兩側の臏骨が互に接合して居り、後方では薦骨が中央に在つてその兩側に臏骨が接合して居り、薦骨の先には尾骨が付いて居る。その臏骨と薦骨との接合して居る部分も、前の方で臏骨の互に接合して居る部分も、その周圍に堅牢な組織があつて、平素は少しも動かぬ位になつて居る。然し出産のときには妊娠中に變化が起つて極々僅かな裕りが出来る。尾骨は薦骨の先に付いて居つて出産のときには後の方え退いて胎兒の出る道を妨げぬようになつて居る。

骨盤は妊娠して居らぬ時と妊娠の初めには、性器を、城廓と云わうか鎧と云わうか、堅固な骨の管の中に入れて保護して居るが、妊娠が進んで來れば子宮は大きくなつて、次第に骨盤よりも上の方に出て、腹壁の方からも觸れるようになる。

骨盤の主要な任務はそればかりではない。脊骨を引受けて腹部、胸

骨盤の任務

骨

盤

五

部、頭部などのような身體上部の支えになり、兩脚が各々臍骨の外側に接合して、更に上體と骨盤とを支えて居る。脚と臍骨との接合にも極めて堅牢な組織があるが、これは誰れも知つて居る通り、かなり自由な確かな運動を営むことが出来る。この目的からも骨盤は堅牢な骨でなければならぬわけであり、脚の運動に必要な筋肉などが骨盤管の内外に在る。

女子の性器

女子の性器は外の方は外陰から、最もその内の方である卵管の剪糸までが一つの管になつて續いて居る。然しその管の太さや、形は所々様々になつて居る。外陰からは先づ陰に入るのであるが、外陰には尿道口が開いて居り、外陰の後方には肛門があつて、肛門と外陰との間は會陰と云う。出産前には外陰は兩側から相接して閉ぢて居るが、

女性性器

外陰

處女膜

陰瘻

陰

出産後には多少開くようになることもある。殊に出産のときに會陰に傷が出来て、それが以前のように癒合しなかつたときには著しい。

陰の入口のところに處女膜と云うものがある。これは性交によつて始めて破れるものであると考えられて居つたが、その他の原因でも破れることがあるから、この膜の破れて居ることが處女性を失うた確かな證據として見ることは出来ぬことがある。元來處女膜と云うものは全く閉ぢて居るものでなく、その孔の大きさや形なども人々によつて差があるから、處女膜が破れたか否かを定めることは容易でないこともある。その全く閉ぢて居るものは却つて治療を要することがある。結婚生活に入つて性交不能であるものの一つに陰瘻がある。陰瘻の原因には處女膜の異常から來るものがあつて醫療で治すことが出来るものである。それを新婚當時にはそれ等の點に理會のないために破鏡の悲劇にまで導くこともあるから注意を要するものである。

處女膜から内は陰である。陰は廣い管であるが、大體から云えば前

子宮口

後壁が互に接するようになって、平常には閉ざれて居り、その内端に子宮の一部分が突き出して居る。その突き出して居る尖端のところは子宮口がある。子宮口は通例は狭いものであるが、出産後には少し廣くなる。若し出産のときに深い傷が出来て、それがよく癒合しないと子宮口の周圍に深い創痕を残すことがある。

子宮頸管

狭い子宮口から内部は子宮頸管と云う細い管である。その頸管から少し廣い子宮體腔に移つて行く。子宮體腔の形は逆にした兩等邊三角形であつて、その兩底邊角のところは卵管に續いて居り、頂點が頸管の方に續いて居る。子宮體腔の前後壁も殆んど觸接して平たくなつて居る。子宮體腔の廣さは三角の底邊のところは最も廣く三乃至五糎であるが、子宮口からその最も奥のところまで約七乃至八糎であることを常とする。

子宮體腔

卵管

子宮の兩隅からは卵管に續く。卵管も亦細い管であつて、その管の内面には襞がある。その管は次第に太くなり、それとともに襞が強くなる。

大きくなり、その末端のところは喇叭の開いた口のようになつて居る。それで喇叭管とも稱えて居る。その開いた口のところは剪綵のようになつて居る。その長さは約十乃至十五糎であつて軽くうねり曲つて居る。

卵巢

卵巢は卵管の後ろの方に在つて蠶豆のような形で、親指の先位の大きいさのものであつて、管になつては居らず實して居る。

卵巢では卵子が成長するのであるが、成熟期に達するとその成長したものが約一ヶ月に一回卵巢の表面から離れ出て、通例は卵管の中に入つて、それから卵管の中を子宮の方へ進むのである。この卵巢から卵が離れ出すことを排卵と稱えて居る。

月經

その他に成熟期になると女子の身體に起る變化に月經がある。これ

月經

月

經

も約一ヶ月に一回子宮から出血するのである。この排卵と月経とは妊娠の爲には大切な役目をするものであつて、排卵の方は當人にもその何時であつたかは不明であることが多いものであるが、月経の方は陰部から出血があるからすぐ分る。排卵があるようになれば通例月経が起るのである。

月経の周期

月経の周期は約四週に一回であつて、繰返して来る子宮からの出血であり、略々四・五日位続くものであるが、時によつて二十四・五日目に見たり、三十日以上に一回見たりすることもあり、その間隔が順調に同じ日数であることもあり、或は早くなつたり、遅くなつたり、不順なこともある。一回の月経に出る血の分量は一定して居らぬが、平均百瓦内外であると考へられて居る。然し個人によつて差があり、同じ人でも時によつて多少の差があることは免れぬ。

月経の初潮

月経の初潮は大凡數へ年十五・六歳の頃が最も多いのであるが、それよりも早いこともあり、遅いこともある。一度初まればその後は休

月経時の容體

みなく繰返すことが普通であるが、時によつて初め一回あつた後數ヶ月の間休んで、その後順當に繰返すこともある。

月経の前後や月経のあるときに氣分の勝れぬことがあり、頭痛や、胸や乳房の痛みや、腰や下腹の痛みなどがあつたり、食事が進まなかつたり、吐き氣があつたり、肩が凝つたり、その外に様々の容體の起ることがある。軽いものは殆んど月経のときには免れ得ぬと思われれる位であるが、重い容體を起すものは性器の異常を伴うことが多い。

月経の異常

月経の繰返して来る隔りの日数の餘り長いもの、餘り短いもの、出血の分量の餘り多いもの、餘り少ないもの、出血の日数の餘り長いものや短いもの、或はそれ等の何れもが定まつて居らぬようなときにも性器の異常を伴うことがあり、或は他の病氣から來ることもある。

妊娠中には月経の止むことが普通である。妊娠中に陰部から出血することは多くは何等かの異常に基くものである。

排 卵

排 卵

排卵は今日では月経の前十二乃至十六日に來るものであると考えられて居り、その排出せられた卵に受精するものであるから、受精は月経の前十二日から十八・九日までに起るべきものであり、その間に受精せぬときには、排卵の後十三乃至十七日の後に月経が始まると云うて居る。この説は今日では最も信用すべき説であると考えられる。

排卵と云うのも約一ヶ月に一回、卵巢から卵子が離れて出るのである。これは卵巢の中には受精し得るまでに發達し得られる下た地になる卵が數えきれぬ程澤山にあつて、その中から順次に發達して、受精し得るような程度にまで成熟したものが順を追うて、卵巢の表面に現われて來る。そこでその外を包んで居る被いが、卵の成長とともに次第に薄くなつて、遂に破れる。そのときに卵巢の中に在つた卵子が飛

卵子の輸送

び出す、それが卵管の剪綫のところから卵管の中へ輸送せられるのである。卵子は自分で移動する力はないが、卵管の表面は卵子を輸送するような仕掛になつて居る。その卵管の中で受精が出來て、受精した卵が猶も子宮の方に輸送せられ、子宮の内面に落付いて、そこに宿れば正常の妊娠が成り立つのである。若し卵管が狭くなつて居つて、受精した卵の輸送の道を妨げると子宮外妊娠が起ると考えられて居る。

排卵のときには格別の容態のないのが普通であるが、時によつて下腹に軽い引き釣るような痛みを短い時間(約一・二時間内外)感ずることもある。これを中間痛と稱えて居る。然しこれは總ての婦人が排卵のときに感ずるものではない。若し中間痛があつて排卵の時期を推定することが出來ればその翌日からは通例受精せぬものである。

妊 娠

排卵・妊娠

妊娠の成立

妊娠が成立するには排卵せられた卵子が、男子の精子に會合して、それが一體になることを必要とする。それが受胎である。受胎は通例卵管の中で出来るものであつて、受胎した卵が、その後も卵管の中を進んで子宮内に下つて來れば、そこには子宮體腔の全面には受胎した卵が落付くべき爲に用意が出來て居る。その場處へ卵が到着して落付けば、それで妊娠が始まつたのである。この受胎した卵が子宮に宿ることを**受胎卵の着床**と云う。若し何等かの異常があつて、受胎した卵が落付き場處を得なかつたか、或は卵子が受胎しなかつたときには、前に述べた排卵後十三乃至十七日の間に月經が始まる。

受胎卵の着床

それ故に月經前の子宮の狀況は受胎した卵の宿るために都合のよいように準備して居るのであつて、その準備が不用になつたときに月經が來るのである。云ひ換えて見れば、月經は妊娠が起らなかつたと云う知らせであり、今まで順調であつた月經の止つたときには妊娠したか或はその他の原因のためであると考えられる。

つわり

妊娠が成立つと第一に月經が止まることは誰も知つて居ることである。その次に起つて來る容態はつわりである。その主もな容態は氣分勝れず、食事が進まず、食物の好みが変わり、胸痞へ、嘔氣があり、或は吐き、體はだるく、力が脱けた感じがあり、頭痛などのあることもあり、多くは便通の秘結を伴う。これ等の容態の軽いときは苦痛も少く、心配も少いが、この容態が重つて體のやつれも増し、口や舌が乾き、腹部が船底のように窪み、耳鳴りや、めまいがある。眼の前にピカ／＼と閃きが見えたりするようなことが起れば重態のものであつて、時には心配せねばならぬ容態を起すことがある。

世間では月經が止りつわりの容態があれば直に妊娠と定めるが、これは中々そのように簡單ではない。妊娠であるかも知れぬが、他の病氣でも同じような容態のものがある。まだその二つの容態の外に妊娠のときに起るべき變化を多數に認め得たときには診断が定め得られる

のである。然し妊娠の初期の間は確診が付き難いことは少からぬものである。

この頃では妊娠の初期のものでも、その妊娠して居る婦人の尿を用いて動物試験をして、妊娠して居るか否かの診断を付ける方法が出来て居る。この方法は少し時間と手数とを要するが随分確實である。

婦人が妊娠すれば胎児は次第に胎内で成長するのであるが、その養分は母親の體から取るのであり、不要になつたものは母親の體を通して外へ棄てるのである。結局母親は自分と胎児の二人前の養分を取り、不要なものを棄てねばならぬ。それ故母親の體の臺所は随分働きが大きくなる。そのために若し母親の體がそれ等の働きを充分にすることが出来ないときには、母親の體の方に故障を起して來ることがある。つまり、その一つであると考えられて居る。

人間の身體の不用になつた成分を取捨てるには、呼吸の方で炭酸な

胎児の養分

胎児の不要分

どのような瓦斯状のものを捨て、尿や汗などによつて液状にして取捨てることも出来るのであるが、食物の方はその栄養に用いた残りを大便にして捨てる。その他の大部分は肝臓で處分せられて腎臓から尿に混つて捨てられるのであるが、若し妊婦の肝臓や腎臓などの働きが母親と胎児との二人前の不用分を始末するだけの力がないときには、屢、腎臓の方に故障の起つた容態を見ることがある。その容態は格別自覺せぬ位のこともあるが、尿の分量が減じたりむくみが出たりすれば誰にも分る位である。それ故に注意深くすれば妊娠中には三・四週間目に一回位は尿の検査を行つた方が宜しい。状況によつては一・二週に一回又は數回行うこともある。

妊娠中に下肢にむくみの來ることは骨盤の中を通る血管を胎児が壓えるために起るものであつて、心配するに及ばぬと考へて居るものもあるが、何時でもその原因から起るものばかりであるとは云えぬ。一方には妊娠中には血液の性質も多少變るからそのためにもむくみの來

下肢の血管の膨れ

ることがあるが、腎臓や、心臓の故障や、脚氣などのために起ることもあるから、下肢だけのむくみでも疎かにしてはならぬ。むくみは下肢の方ばかりでなく、顔や、全身にも來ることがある。そのときには一層注意して早く醫診を受けねばならぬ。

また下肢の皮膚の下に癭蚓がうねつたように青黒い色をした膨れが出来ることもある。これも妊娠した子宮が骨盤の中の血管を壓え付けるために血管の弱い人に起ることがあるが、これは外陰や陰の中などにまでも出来ることもある。多くは格別の障りを起さぬが、時としては命懸けの心配をせねばならぬこともあるから、状況によつて出産のときには入院して醫師の監督を受けた方が安全である。時によつてはその部分にかゆみがあつたり、痛みがあるために掻き破つて出血したり、その膨れた物の壁が次第に薄くなつて出血を起すこともあるから、氣を付けねばならぬ。若し出血したときにはすぐ醫療を受けるようにするが、それまでは消毒した綿やガーゼであれば最も宜しいが、止む

乳房

初乳

まくり

を得ぬときには清潔な綿かガーゼか紙のようなものを出血するところに當てて強く指で押えて醫師の手當を待つが宜しい。

妊娠の徴候が顯われて來るとともに乳房は次第に固く膨らんで來て、乳頭は暗褐色になつて來ることが普通である。然しその色づくことは個人によつて強弱の差がある。四・五ヶ月から先きになると乳房を搾れば薄い米のかし汁のような色の粘り液が出るが多い。出産のすぐ後にも同じようなものが出る。これは初乳と稱えて居つて、生れた小供には恰もまくりでも飲ませたと同じように、便通をよくして胎糞を通じさせるのに適當して居るものである。その他にまだ大切な役目もあるものであるからあちちなど云うてこれを捨ててまくりなどを用いてはならぬ。

その他にも妊娠のときには胎兒が次第に成長すると共に子宮が大きくなり、腹部が次第に膨れて來るばかりでなく、性器の全體に互つて様々の變化が起る。そのある部分のものは出産のときに、都合よく出

産の運ぶための準備もある。臨月になれば殆んど腹部全體は子宮ばかりで満されて居るかと思われる位になり、胃は上の方に押し上げられ、腸は隅々の方え押し込まれる。それ等のために食事が少量になつたり、便通が秘結したりすることもある。妊娠するとその初期でも平常よりは一層秘結する傾きになるものが多い。それは次第に大きくなる子宮で腸の一部を壓えるためもある。

妊娠中の胎兒はその最初には自分のみの力で成長するが、それは極めて短い期間であつて、子宮の内面に落付くと共に次第に母親の血液の方から養分を受けて成長することになる。そのためには母親の子宮壁の一部分と胎兒の方の外側を包んで居る卵膜の一部分との間に充分な養分を受ける設備が出来る。それが**胎盤**である。胎盤は出産のときには通例胎兒の生れた後に出る**胞衣**の大部分である。

胎盤では母親の血と胎兒の血とは直接に混つて居るのではなく、

胎盤

臍緒

の兩方の血の間には薄い膜があつて、その膜を滲み通して母親の血の中の養分が胎兒の血の方え移つて行くのであつて、母親の血と胎兒の血とは直接に續いて居るのではない。

胎盤から**臍緒**があつて胎兒の方に續いて居り、臍緒の中には動脈と静脈との血管が通つて居り、それを寒天のようなブヨ／＼したもので保護して居る。胎兒の生きて生れたときに、臍緒に觸れて見ればその中に在る脈の動きが分る。臍緒は長いこともあり短いこともあり、長さは一一定して居らぬ。然し大凡五十種内外のものが多い。

胎兒はその發育の始めには逆もその形が明かでない程に小さなものであるが、次第に人間らしい形を具えて來るものであり、三ヶ月の終り頃には男女の區別も定められるようになる。胎兒は**胎水**の中に住んで居るものであつて、その胎水は卵膜の囊で包まれて居る。胎盤も卵膜の一部分であつて、胎兒は胎盤との間には臍緒で繼がつて胎水の中に居るのである。

胎水

胎盤の作用

そう云ふ仕組になつて胎内では胎兒はその養分を母親から胎盤を通して取るのであるが、同時に胎兒の身體を養うて成長させるために役に立つた跡の不用成分は、胎盤を通して母親の方へ棄てるのである。胎盤から養分を取る有様は丁度植物がその根から土の中に在る養分を取るのと同じようである。然し胎兒のときには不用分を棄てることも同時に行われるのである。それ故に胎盤が何等かの故障のためにその全部か、大部分が妊娠の間か、分娩の間に即ち胎兒の生れるまでの間に、子宮壁から剥がれることがあれば胎兒が死亡することがある。臍緒の中を通つて居る血管を長い時間強く壓え付けて居ることも胎兒と胎盤との間の血の道を塞ぐために胎兒を死亡させることがある。

胎兒の胎内の位置

胎内の胎兒は臨月になれば頭を下の方に向けて居るものが多いのである。臨月以前には逆になつたり、横になつたりして居ることも少くはない。それは胎水の中に浮いたようになつて居るからである。

胎水の作用

胎兒は腹壁や子宮で被はれて、外から少し位の力を加へられても、

その身體に受ける影響が強くないように保護せられて居るが、胎水も猶ほその助けをして居る。

胎水はその他には胎内で胎兒が窮屈に住つて居るときに、その互に接觸して居る身體の部分が互に癒着することを防ぐために役立つて居る。その外には胎兒が胎内で動いたときに、その響を母親の子宮などに及ぼすことを少くする役にも立つて居る。その他には出産の時に胎水の袋の一部が胎兒の出る道を次第に擴げて準備したり、その後胎水の袋が破れて、即ち破水をして胎兒が出るとき滑りをよくする役目もして居る。

胎兒が胎内で成長するにはそのように保護せられて居るのであるが、次第に胎兒が大きくなると共に子宮もその大きさを増して、次第に骨盤の中を上つてその一部が腹壁の下に觸れるようになる。大凡三ヶ月の終り頃から後は辛うじて外から觸れるようになる。然し胎兒の心臓の鼓動(心音)を外から診察して聞き得たり、胎兒の子宮の中で動く

胎兒の心音

ことを妊婦が感じたりするのは大凡五ヶ月頃から後である。九ヶ月の終り頃になると子宮が胸先にまで届くかと思はれる位になり、時としては食事も一度に多量は取り得ぬようになる。それから子宮が少し下つたような感じがして食事なども容易くなり、やがて出産に近寄るのである。

臨月のときの子宮の大きさは妊娠でない平常のときに比べれば、その内部だけの容積でも約四百五十倍であり、全體の重さで見ても胎兒の出た跡でも平常の四・五十倍になるのであるから、人間の身體で見れば他には類例の少い位の急劇な増大である。その上に胎兒の成長のために、母親の身體の諸器官が平常よりも餘分の働きをせねばならぬのであるから、妊娠は格別の障りが起らねば病氣ではないが、平常の狀況とは著しい差があり、病氣に準ずべきような狀況である。若し故障でもあればそれは何れも随分注意を要するものであつたり、色々の重い病氣を起す源にもなることがあり得るから、異常のあるときは勿

論のことであるが、異常のないときでも充分行届いた注意を要するものであることは誰も理會し得られることである。

それ故に妊娠中には特に病氣はなくとも、異常はなくとも攝生に注意を要するものである。然しその攝生には平素慣れて居る狀況を餘り變化なく續けて行くことは最も望ましいことであるが、初回の妊娠は屢々結婚して後僅かの時日を経た後であることが多いために、妊婦の日々の生活狀況は婚嫁した家の風習にまだ慣れぬ間であつて、そのために自分の身體に適する攝生の法を守り難いようなことも少くはない。この點は世故に長けて居る舅姑の注意を要することであつて、婚姻直後の妊娠などであつたならば、なるべく生家に在つたときの生活法に近い狀況に在らせるように注意することは賢明なことである。

つわりの狀況のときには食欲の減ずるばかりでなく、食物の嗜好が變ることが多い。サッパリしたものを好むようになり、酸味のものなどを好むようになることは世間でも知つて居ることであり、妊娠の素

人診断の一つの條件になつて居る位である。然し必ずしもそれに限らず、却つて濃厚なもの、辛いもの、又は普通には食品にせぬようなものを好むことがあり、酒類などを望むこともある。普通の食膳に供するものは嗜好に応じて用いさせて差支えはないが、なるべくは餘り偏食にならぬようにすることを要する。餘り不消化なものなどを大量に又は續いて用いたりすることも害のあることがある。食事の分量は大體本人の望むところに任せて宜しいが、餘り一回の量の少いときには一日三回と限らずに、相當の時間を置いて數度に食事をさせることも差支えはない。餘り食事が進まぬときや、いつまでも嘔氣があつたり、胸先がつかえたりするようなときには、藥用その他の處置を受ける必要があるから診療を求めが宜しい。

特別な栄養品

この頃種々の栄養品などやカルシウム製劑などを特に妊婦のために勧める人もあるが、妊娠以前にも健康であり、特に體力の薄弱でない婦人であれば、妊娠したからとて特に食物を變えるには及ばぬと思わ

れる。寧ろ嗜好が變つたときには差支えのない限りそれに従うて食物を與えるがよい。特に石灰分の消耗が多いと思われるときか、血液の性質が思わしくないと考えられるようなときなどには、それ／＼適當と思われる藥劑を用いねばならぬこともあるが、妊娠には誰にてもカルシウムを多量に用いねばならぬとか、ビタミンの或る種類のもを大量に用いねばならぬと云うようなことはない。それ等は何れも個人的に必要な場合がないとは云えぬから、必要であるかないかは醫師に指圖を受けることが安全である。

便通

便通は秘結することが多いから、毎朝冷水を飲むとか、每晚果物を用いると云うような方法で快通を得らるれば仕合せであるが、その位で效能がなければ、軽い下劑を毎日續いて用いて便通を得るか、坐藥又は浣腸を用いることも止むを得ぬ場合があるが、藥劑を用いたり浣腸などをするには醫師の指圖に従うことが安全である。運動を適當にすることも便通を程よくするためには有効なことである。

下痢

反對に下痢の傾きのあるときには第一に食物に注意して腸内に瓦斯の多く出来るようなもの、不消化なものなどを用いぬようにして、腰や腹部を冷えぬようにする。然し懷爐や濕布を用いることは獨斷でやつてはならぬ。

尿通

妊娠の初めと臨月の頃に尿通の近いことがある。それは次第に大きくなる子宮のために膀胱が押されたり、或は胎兒の頭部などが骨盤の入口に深く入り込むために膀胱の壓されるためであるから、大抵は心配にはならぬものであるが、若しそれと同時に痛みがあるとか、尿の中に血が混つて居るとか、濁つて居るとか、何か異常が伴うときには診査を受ける必要がある。尿量の減じたときや、同時にむくみのあるときなどには殊に注意を要する。

着類

妊娠中の着類は餘り強く緊め付けぬようにして、軽いものが宜しい。寒さのときでも餘り重ね衣をすることを避ける。然し餘り冷えてはならぬから心地よく温く感じる程度にせねばならぬ。帯、紐のようなもの

いわた帯

のを堅く締めることは害のあることが多い。

いわたおび(結肌帯・五月帯・鎖帯)は我國では習慣の上から一つの祝事になつて居るから餘り強く締めず、只保温の目的などに用いることは少しも妨げはなく推奨しても宜しいが、これを強く締めて胎兒を大きくならぬようにして、安産を望むなどは全く思慮の足りないことである。然し既に何回も妊娠して腹壁の甚だしく弛んだ人であるとか、餘り胎兒が下り過ぎて居るようなときに、それ等を支える爲には腹帯を用いねばならぬことがある。

この頃では椅子に腰掛けて仕事をする事が多くなつたが、腰を掛けて居たり立つて居つたりすれば、坐つて居るよりも下肢や下腹や腰が冷えるものであるから、それ／＼保温の方法を考えて股引のような形のものをを用いることは望ましいことである。

寝具に就いても同じく餘り重い蒲團を重ねたりすることは好ましくはない。成るべく軽くて温かいもので適度に保温をしたいものである。

寝具

運動と勞作

妊娠中の**運動や勞作**はどの位までは差支えないかと云うことは、當人の平素の運動や勞作の程度によつて異なるものであり、一言で云えば過度の勞作は害があるのである。それ故に家庭の仕事でも平生慣れて居る程度で餘り強い疲勞を感じぬ程度であれば大抵害はない。家庭の仕事でも過度であつたり慣れぬことは害がある。その他に腹に力を入れること、いきむようなことは害がある。殊に軽い程度のもので長く續いたり、繰返したりすることは危険が多い。以前から爪立したり、高い處え手を延したり、重いものを提げたり、重い抽斗を明けたりするようなことを戒めて居るのもそのためである。ミシンを踏んだり、舞踏をやつたり、ピアノを弾いたりすることも、短い時間であれば害のないことが多いが、長い時間に亙ることは注意を要する。旅行は危険が多いから熟慮を要するものである。汽車・電車・自動車などに乗ることも、その影響は個人によつて差があり、またその乗つた車や、線路又は道路の工合、運轉の仕方にも關係があり、腰を掛けて居

ると立つて居るとでも差があり、一つの乗物の中でもその座席の位置や構造によつても差がある。

然し種々の動作をすることは危険が伴うからと云うて全く運動をせずに**安靜**にして居ることは望ましくない。殊に長い時間端坐して居つたり、多人數の集るところに行つたりすることは避けるが宜しい。最も安全で有效なことは個人に適する程度の**散歩**か、**體操**である。體操は近頃追々に研究せられて來たが、殊に平素から體操などを充分に練習して置くことは大切なことである。世間では婦人は勞働をすることがないから、なるべくしなやかに身體を發達させるがよいと考へて居るものが多いようであるが、少くとも出産のときの勞作には堪え得るだけには發達させて置かねばならぬ。出産の時の勞作は随分大きいのみならず時間もかなり長いことがあるから、これに堪えるためには平素から充分に筋肉の發達に注意して置かねばならぬ。殊に腹部の筋肉や、呼吸のために働く筋肉をよく發達させて置くことは有利なこととて

體操
散歩

旅行

ある。その外に適度の運動は便通を整え、食事を進めるが、安静は便秘を來し易く、随つて食事も進まず、體力も薄弱になるものである。今一つ**旅行**に付いて注意を要することは、妊娠中であるに關らず旅行せねばならぬときには屢々吉凶其他の儀禮が伴うことと、旅行準備などのために思わず大きな勞作をして、その上に旅行をすることである。餘儀ないこと止むを得ぬことと云う間に既に禍根が養われて居ることがある。これ等はかなり多く見るところの事實であるが、妊娠や分娩を障りなく経過させるためには避けたいことである。

皮膚

妊娠中には**皮膚**にも種々の變化が起ることがあるから、皮膚を清潔にすることはそれ等の豫防のためにも大切である。従つて入浴や、皮膚を拭うことや、冷水摩擦などは平素から慣れて居る程度であれば、續けて行つて差支えない。發疹などがあつたときには素人療治には危険がある。

入浴

入浴は熱い湯に入らぬことと、長湯せぬことを心掛けねばならぬ。

下り物

入浴の後にはなるべく暫くの間靜かにして、風を引かぬように注意せねばならぬ。入浴のために動悸を感じたり、氣分が悪くなるようなときには入浴を止めるとか、度数を減じるとか、浴後に暫く床に就くとか云うように一層の注意を要する。時によつては醫診を求めらることを要する。

妊娠中には時によつて陰部からの**下り物**が幾分増すことがあつて、そのために特に陰部を洗うたり、薬用をしたりする必要の生じることもあるが、これも素人療治は危険がある。殊に下り物が膿のようであったり、血が混じりたりして居るときには一層氣を付けねばならぬ。

睡眠

妊娠中には**睡眠**は殊に充分でなければならぬ。安眠を得るためには食事・衣服と夜具・運動・便通などの攝生が大切である。強い感動を起すような讀物や、談話などを慎むが宜しい。然し所謂精神修養の方面に屬することは望ましいことである。昔から**胎教**と云うことを稱えて居るが、これも大切なことと思われる。然し妊娠の間のみならず他

胎教

妊

編

の時にもそれ等の點に留意することは大切である。殊に妊婦自身ばかりでなく家庭の全員がその心になることが最も望ましいことである。平素から潔く、正しく、圓滿な家庭であれば特に胎教の必要はあるまいと思われる。

乳房

乳房の皮膚殊に乳頭の皮膚は出産後の授乳によつてすり剥けたり、ひびわれが出来たりすることがあつて、そのために痛みが強くて授乳が出来難いようになり、乳房に膿を持つことがある。妊娠中から既に毎日三・四回づつ冷水で洗うか、或は焼酎か、酒精と水とを等分位に混ぜたもので洗えば、それで幾分か皮膚を丈夫にすることが出来る。若し乳頭が引込んで居るようなときには、洗うと同時に自分で乳頭を引張り出して乳頭の根元のところを軽く揉むようにする。

性交

性交は妊娠によつてその最大目的を達したのであるから、妊娠中はこれを避けることが常道である。少くとも出産豫定日に先だつ四・五週間は必ずこれを避けねばならぬ。

妊娠の持續期間

妊娠の持續する期間は最後にあつた月經の第一日から約二百八十日、即ち四十週とせられて居り、二十八日を一月にして十ヶ月である。これは便宜上から最後の月經を目標にしたものであつて、前にも述べた妊娠の成立から考えれば約二週を減ぜねばならぬ。その上妊娠の終りに出産の始まる日取りも一定はして居らぬから、以上の計算をして出産の豫定日を考えてもそれが的中するとは限らぬものである。

成熟した胎兒

胎内で胎兒の發育する度合は一定しては居らぬ。個人によつて差があり、同じ人でも毎回少しづつの差はあるべきものである。胎内で成熟した胎兒の標準の體重は約三千グラム、身長は約五十糎と示されて居るが、それよりも發育の程度の高いものも低いものもあると云うことは誰も知つて居る通りである。従つて妊娠中の各時期に於ける發育の程度も體重や身長の外に、種々の發育状態を考え合せて定めるより他に方法はないのである。一般に云えば両親とも健康で、妊娠の経過中にも異常のなかつたものの小兒は發育もよい筈である。然し必ずそ

遺傳

うであると定めるわけには行かぬ。それは両親や、祖父母や、曾祖父母などの體質や、體格などを伝えることがあるからである。それは所謂遺傳と云うものである。遺傳のことに就てはここに詳しいことを述べぬが、親子の間にはその體格・體質・容貌などばかりでなく、言語・動作など細かいところまで似るものであるのを見ても了解することが出来る。病氣の中では微毒は遺傳すると云うことは確實であるが、結核や、癩病などは研究の結果では遺傳はせぬと考へて居る學者が多い。癌腫のようなものも中風なども同様である。然しそれ等に罹り易い性質は遺傳するであらうと考へられて居る。精神病の或る種類のものも同じ病氣或は精神病に罹り易い性質を遺傳すると考へられて居る。

今日まで人類の受胎する時期は月經の終つた直後が最も多いが、その他の時にも受胎し得ると考へて居つたものであるが、近年の研究によつて排卵の時期が明かになり、それと共に受胎の研究が進んで、その研究の結果によると、排卵は次に起つて來る月經の前十二日から十

受胎の期間

六日の五日間の何れかに起るものであるから、その三日前からは受胎が起り得るものであると云うのである。然し排卵のある度に受胎するとは限らぬが、その以外の時期即ち次回の月經前十二日から十九日までの八日間を除いた期間には受胎することはないと云うのである。この事柄はかなり多數の實例の上でも確實であると考へられて居るものであるから、月經の間違なく順調であるときには、その時期を知り易いのである。然し月經が二十八日目にあつたり、二十九日目にあつたり、二十六日目にあると云うような不順の場合には、次の月經が何日に來るか定め難いから、月經の本當に順調でないときには、最終にあつた月經から計算することは甚だ困難である。この研究によつて月經の順調な婦人は、必要のあるときに妊娠せぬようにするにも或る時期だけ性交を避けさへすれば、有害な器具や藥劑を用いたり、その他の方法を用いたりする必要がないのである。

この方法による受胎の調節は生理學上の法則を應用したものであつ

妊娠の診定

て、法律上からは勿論、道徳上からも罪惡とは考えられぬものであり、身體にも何等の害を與えぬものである。

妊娠の決定をするためには診察を要することは云うまでもない。その診定は時によつて必ずしも容易でないことがある。世間では妊娠であるかないかの診断位の付かぬ醫師はあるまいと思つて居るようであるが、稀には随分判断し兼ねることがある。然し近年は妊婦の尿を用いて動物試験を行うて診断する方法が出来たから、その結果に依れば餘程正確に診断が付くようになった。

妊娠と定まれば平素の攝生法の上に更に妊娠のための注意を加へねばならぬ。妊娠中は自分ばかりの生活ではなく、胎内に在る胎兒の健康や發育に重大な關係があるから、特にそれ等の點にも注意せねばならぬ。妊婦が妊娠中に氣分が勝れなかつたり、様々の容態があるときは捨て置かずに醫師に相談することが必要である。軽い容態である

と考へて居る間に重大なことを惹き起すことなどがあるから、決して油断は出来ぬ。

出産の準備

妊娠や出産のときや、産後の世話は何も異常な容態のないときには産婆のみの取扱に任せても差支へはないのである。然し異常のあるときには産婆ばかりで取扱うことは出来ぬのである。これも世間では産婆は凡ての出産を取扱うことの出来るものと思つて居る方が多いようであるが、妊娠中でも、出産のときでも、産後でも異常なことがあるときには必ず醫師の診療を要するものである。それでは醫師は正常の妊娠や出産や産後の取扱をしてはならぬかと云うと、それは取扱をすることが正當であり、少しも差支へはないのである。その理由は前にも述べた通り妊娠・出産・産後などのときは病氣との境にあると見做

産婆

醫師

してもよい位であつて、病氣を起し易い所謂危機一髪の状況であるから、そう云う危険を起さぬように充分な用心をして、何時でも異常が起つたときには、それに應じた處置の出来るようにし、或は異常の起らぬ前にその豫防をすることが必要である。それ等の處置には醫師の手によらねばならぬことが多いのである。それ故に産事に就いては異常のあるときには必ず醫師の診療を受けねばならぬが、異常のないときでも産婆も頼み醫師から指圖を受けることが賢明な策である。殊に急に起つて来るような異常産などのときには、醫師が既に産床に来て居る場合と、異常が起つてから後に往診するような場合とではその處置の速かに届くと否との關係もあり、時によつてはその處置の速かに届いたために生命に關する程の大きな危険をも避ける望みのあることもある。近頃病院や産院に入院して出産することの次第に行われるようになったことも、それ等の點から見て獎勵すべきである。

出産の準備

出産の準備は何時頃から整えるがよいかと云うに、理想的に云えば妊娠と定まつたならば、すぐに脱脂綿(滅菌してあれば最も宜しい)と消毒薬位は醫師か産婆に相談して用心のために手許に備えて置くが宜しい。それ等のものは萬一流産などの懸念があつて、出血でも起したときの應急の手當にも必要である。

多くは妊娠中七ヶ月の終り頃までに新産兒の衣類・夜具などのような調度を整えて置く。その頃から後には胎兒が生れ出て生存し得る望みが多いからである。その以前に生れた小兒は育ち得ぬことが普通である。

出産の當時に必要な薬品・脱脂綿・ガーゼその他着類・蒲團・敷布・下敷・小兒の世話に必要なものの準備なども産婆と相談して適當な時に整えねばならぬ。近代の醫學は出産のときには殊に所謂防腐法を守ることを要求して居るのであるから、その點に就いては取扱の任に當るものの意見に従うて準備して置くことを要する。例へば産後の下り

産室

物を吸取らせるために用いる綿やガーゼなどは豫め消毒して置くとうようなこともその一つである。

産室に用いる室は都合が付けば廣さは四坪以上で、室内に諸道具を置かず、日當りよく、隙間風も入らず、風通しをよくすることが出来て、臺所や便所の臭氣などの來ないところで、産室に使う前に充分な掃除をして、なるべくは一度消毒をした室が望ましい。殊に病人などの寝て居つた室であれば一層注意を加えたい。

照明

出産は夜に入ること少くはないから、照明の準備も充分でありたい。あるときは裸蠟燭を用いて居つたために治療に用いた藥品に火を引いて、産婦に大火傷をさせたと云うことを聞いて居るから、なるべく安全な明りを用意して置くことを要する。

暖房

猶ほ冬時候では室内を温める暖房の工夫もして置きたい。然し以上の條件を充した室を得ることは容易ではないが、務めてこれに適するようにしたものである。

出 産

出 産

妊娠の期間が終れば**出産**が始まる。

妊娠の終りになつて出産に近寄つて來れば、腹の中に在る子宮が時々硬くなる。そのときに少しの痛みを覺えることもある。これは出産の準備である。その頃には尿通が近くなることがあり、胎兒は子宮の中で骨盤の方へ下がつたような感じのすることもある。

愈々出産が始まれば子宮が硬くなつて張るような感じや、痛みが強くなるばかりでなく、殆んど同じ位の時間を置いて、即ち毎十五分・毎十分位に一回位づつ張つて來るか痛んで來る。それに前後して陰部から極少量の血を交えた下り物がする。それが産の始まつたしるしである。然しこの出血は割合に早くあつたり、随分遅くあつたりするから、必ずこればかりを目當にすることは出來ぬが、多くの場合にはこ

出産のしるし

陣痛
腹壓

れがあれば出産が始まったと見做すのである。それから痛みが次第に強くなり、その繰返して来る隔りも近くなつて来て、それと同時にいきみが立つて来る。この痛みは陣痛と稱えられて居り、いきみを腹壓と云うて居る。陣痛と腹壓とは出産を進ませるためには大切な力である。陣痛は子宮が強く締つて胎児を押し出そうとするために感じる痛みであり、腹壓はその力を助けるために腹壁や胸と腹との間に在る横隔膜を強く張らせるのである。横隔膜を強く張らせるためには呼吸を止めていきむのである。

これ等の力の働きて胎内に在る胎児が次第に、子宮の袋の口から押し出されるのである。然したた袋の中から絞り出されるように押し出されるだけでなく、平常にも妊娠中にも保護の役目をして呉れた骨盤の中を通り抜けねばならぬ。骨盤の管の廣さは成長した胎児が通るには殆んど裕りがない位であつて、相當の骨折りをせねばならぬことが普通である。それは恐らくは骨盤の中を通り得られる最大限度まで發

育して出産が始まるのであらうと思われる。誠に造化の妙機は驚くばかり細かい計畫の下に在るものであることを感じさせられる。

成熟した胎児の身體の中で最も大きい部分はその頭である。肩や胸の周り、腰の周りなどは頭の周りよりも少しく小さい。その上胎児は頭が下に向いて先きに出て來ることが最も多いのである。その場合には頭の生れて出るまでには相當の時間がかかるが、頭が生れて後は餘り時間を要せずに胴や脚の方が生れて來る。頭を下に向けて生れる場合でも頭部は全く眞圓ではないから、少し向きが違えばそのために出産の手間取る恐れがある。それ等の細かい説明は理會し難いことであるから、ここには省いて置く。

子宮の袋の口が開いて胎児が通るためには陣痛と腹壓が主もな働きをするのであるが、その時に胎児の居る胎水の袋が子宮の袋の狭い道のところへ、内部から強い陣痛の力で壓え付けられるためにハミ出して來て、その水袋のために子宮の袋の口も次第に擴げられる。相當に

破水

子宮の口が開いたところで胎水の袋が破れて、胎水の一部が溢れ出す。それを破水と云うて居る。このときには稀に僅かな音がすることがある。この破水で漏れた胎水はその後に胎児が通る道を濕して滑りをよくするために役に立つものである。この胎水の袋が餘り早く破れると、子宮の口の開くために時間の長くなることもあり、水袋でなくて胎児の頭で直接に子宮の口を擴げる爲に餘分に痛みを覚えることもある。然し餘り胎水の袋の破れることの遅いときには適當な時期にそれを破らねばならぬこともある。

陣痛が次第に強くなり、その起つて來ることも近くなつて、いきみが立つようになり、産婦は便通のあるときのような感じをして、全身が汗ばんで來るようになり、陣痛のときには全身を震はせ、時には兩便を洩すこともあり、ふくらはぎの部分がつよつて、こむらがり起すこともある。そのようになれば、多くは胎児の額は陰部に現われて

來る。その頃になれば産婦は屢々叫び聲を出すことがある。我國の婦人は前から教えられて居るから、聲を出さずに辛抱をして力を入れるものが多いが、歐米の婦人には高聲に叫ぶものが多い。それから次第に進んで兒頭が全く陰部から生れ出れば、次の痛みが來ると共にそれに續いて胴と上肢・下肢が生れ、胎児が生きて居れば高聲に叫んでその無事に生れ出たことを知らせる。胎児の頭部や、胴の生れて出るときには陰部の内外に傷の出來ることが少くはないから、出産を取扱う産婆や醫師は出産の時には工夫してその傷をなるべく出來ぬように若し出來てもなるべく小さくて済むように注意する。その一つの助けに兒頭の生れ出ようとするときには産婦にいきまぬようにさせて兒頭の急に出るのを止めるようにすることもある。

胎児が生きて生れたときには、適當な時期に臍緒を切つて、先づ清潔な布に包んで置いて、母親の方の手當をする。胎児が生れた後には猶ほ軽い陣痛があつて胞衣(後産)が生れる。その前後に出血がある

後産の出産

出 産

四七

出産時の出血

がその分量が餘り多くないときには心配はない。多過ぎるときにはその出血の原因に應じて適當な處置を受けねばならぬ。

出産の時の出血の分量はどの位までを尋常であるとするかと云ふことは、中々定め難いことであり、産婦の状況にも依るものであるから一概に定められぬものであるが、三百瓦位までは少しも心配はないが、それ以上七・八百瓦位までは大抵心配なく堪え得られるものである。猶ほそれ以上千瓦をも越すようであれば危険な容態が起ることがないとは云えぬ。然し二千瓦内外の出血があつても格別心配な容態を起さなかつたこともあるが、千瓦内外を超えるときには用心せねばならぬ。時によつてはこれ等のために行う處置が急を要するために外見からは粗暴に見えるような處置を取らねばならぬこともあるが止むを得ぬことである。

胞衣即ち後産が生れ出してから後出血も少く、子宮も出産の後には著

後陣痛

しく小さく硬くなつて、産婦は疲労を感じる位の他には何等の容態もなければ、腹帯を纏うて、陰部には丁字帯を用いて完全に消毒せられた布片を當てて、衣類を整えて、休息に入らせるものであり、これが出産は終つたのである。

出産の終つた後にもまだ時々陣痛のような痛みの軽いものが起つて来る。これは後陣痛と稱える。後陣痛も時によつて堪え難い程強いこともあり、またその度に陰部から出血することがある。出血の量の多いときには手當を要することがある。

新産兒は臍緒を切り離した後は、皮膚に着いて居る脂垢を始末して入浴させる。入浴させる湯の温度は攝氏三十八度を超えぬが宜しい。口中や眼は浴湯でない清潔な温湯で洗うて、その後には點眼する。この點眼は新しく生れた小兒(新産兒)の眼疾に罹つて失明する恐れが多

新産兒の處置

臍緒・入浴

點眼

出

産

着衣

いので、どの場合にも行はれて居るものである。その眼疾の原因になるものは淋疾の病源になる微菌が最も多いのであるが、他の病源菌で起ることもあるから、確實に両親に淋疾がなくてもこれを行うた方が安全なものである。時々自分等夫婦は淋疾に罹つたことはないから點眼を止めて呉れと云われることもあるが、矢張り點眼して置いた方が安全である。

それから衣類を纏わせる。第一に臍緒の短く残つて居る部分に繻帶を用いて、汚れることを防ぎ、その後に着物を着せる。肌につけるものは軟い白い木綿で作つた肌着が宜しい。襦袢も同様であるが、これ等のものはこの頃は色々の形のもが用いられて居る。衣類の要點は汚れ目のよく見えるもので、肌觸りの柔い、温いものが宜しい。毛織のものなどは時々新産兒の皮膚を刺戟して發疹することがあり、絹や麻も多くは冷たく感ずることがある。染色したものはその染料が皮膚を刺戟することがあるから注意を要する。新産兒には白色の衣類を用

いることが理想的であると考える。夜具その他も同様の注意を要する。

正期産
晩期産
流産・早産
未熟産

出産は通例妊娠十ヶ月の終りに始まるものである。それを正期産と云うて居る。それよりも遅れるものは晩期産であり、正期産よりも早いものは流産・早産である。早産と云ふのは大凡妊娠八ヶ月から後で正期産までの間に生れるのであり、流産は妊娠七ヶ月以前のものであるが、その中でも妊娠五ヶ月以後のものを特に未熟産と稱えて居る。未熟産で生れた小兒は随分注意を加えて育てても成育せぬものが大多数であるが、早産で生れた小兒は妊娠期間の長いもの程成育する見込が多いのが普通である。

正期産
異常産

出産の時に何等の異常も起さぬものは正期産であり、異常のあつたものは云うまでもなく異常産である。異常産にはその状況に応じて處置を必要とすることが多いが、正期産であつても異常の起ることを豫防する爲に手當をすることがあり、會陰の保護などはその一つである。

出
産

自然産
人工産

自然産と云うのは陣痛も自然に起り、總ての経過が手當を要せず
運び、只會陰の保護や、臍緒を切る位のことで済んだものであり、人
工産と云うのは大なり小なり手當をしたり、手術をして出産を進行さ
せたものである。それ故に異常産には人工産が多いのであるが、その
凡てが人工産を行うのではない。また醫師が必要を認めるときに處置
によつて早産をさせたり、流産をさせたりするものも人工産に屬する
ものである。

出産の難易

出産の難易は大體のことは骨盤の大きさと胎兒の發育の程度とを基
礎にして推定するものであるが、その他には出産のときに胎兒が骨盤
の管の中を通る状況にも關係するものである。それは前にも述べた通
り胎兒は頭を先に進ませて生れることが最も多いのであるが、その頭
は全く球形ではないから骨盤管の中へ入り込むにも、頭の周圍の割合
に大きいところへ入り込むのと、割合に小さいところへ入り込むのと、

通過するのに難易の差が生じる。猶ほその外に子宮の袋の口や陰部な
ども胎兒が通るためには随分引伸ばされねばならぬから、その伸び易
いときと、伸び難いときでも進み方の難易がある。今一つ最も大切な
ものは陣痛と腹壓との二つが充分に強くなければ肝心の押出す力に不
足があるから、出産は容易に進まぬことは明かなことである。然し出
産のときの胎兒の頭の進入する状況と、陣痛や腹壓の力などは臨月の
頃になれば幾分か推定し得ることもあるが、甚だ不確實なものである。
然し骨盤の大小は何時でも外部からの測定と内部からの診察とに依り、
或は必要のあるときにはエックス線の力によつても之れを推定するこ
とも出来、胎兒の發育状態も診察によつてその大體を知ることが出来
るから、まづその二點を主もな基礎にして豫想をするのである。それ
故に出産前に豫め今度の出産は易いであろうとか、手間取るであろう
とか見込を立てることは全く出来ぬのではないが、甚だ確實であると
は云い得ぬものである。

妊娠中に起る異常な
容態
つわり

妊娠中に起る異常な容態はその一・二は既に述べた。最も多く起るものはつわりであるが、その軽いときには格別心配することもないが、時によつては次第に重くなることもあつて心配せねばならぬことがある。その次に屢々心配させられるものは流産である。

流産

流産は妊娠中何れの時期にても起り得るものである。然し第八ヶ月より後の正期産までの出産は早産と稱えて居る。五ヶ月位に入つてから後の流産や早産では、その経過が臨月になつてからの出産に似て居るが、それ以前即ち四ヶ月までの流産は経過に少し差がある。それは主にも胎児がまだ出来上つて居らぬときと、出来上つてから後とで差があるのである。

四ヶ月までの流産

四ヶ月までの流産は大抵は陰部からの出血と、下腹や腰などの痛みか、張るような感じて始まる。その痛みが先だつこともあり、出血が

流産の完全と不完全

先だつこともある。その容態が起つたばかりのときに早く診療を受ければ流産は中止して、妊娠は正期産になるまで持続することも全く望みがないではないが、適當な處置をしても流産に終ることもある。

流産をして胎児や胞衣に相當する部分などが完全に出れば、産後も順調に経過することが普通であるが、若し胞衣に相當する部分が幾分でも残ると、子宮の收り方も悪く、産後の下り物もいつまでも止まず、時によつては再び大出血などを起すこともあり、或は正期産の後に起る産褥熱と同じ容態を起すこともあつて、大きな心配をせねばならぬこともある。それ故に流産のときにはなるべく最初からの下り物を取り捨てずに全部残して置くことは、胞衣になる部分が完全に出たか否かを調べるときに、醫師のために都合のよいことであり、それが治療の方針を立てるためにも必要なことである。

習慣流産

流産や早産が二回も三回もそれ以上も引續くことがある。それを習慣流産と稱えて居る。それは種々の原因から來るものであるから、そ

の原因を明かにすることが出来たときには、その原因を取除くように治療を受ける必要があり、若しその原因の明かでないときには、醫師の考案に従うて治療や攝生の方法を守ることが要する。引續いて早産するときには屢々微毒に原因することがあるために、それを唯一の早産の原因と想うて居る人もあるが、それは適當ではない。その微毒に基いて居る疑いのある場合には血液によつて病毒の有無を調べて後に治療を加えることがある。その他の原因のときにもそれ／＼治療の方法が工夫せられるものである。

胞状鬼胎

流産の一種と見做すべきものに胞状鬼胎の出産がある。これは胞衣になるべき部分が病氣になつたものであつて、そのために胎兒は充分に發育し得ぬこともあり、全く發育し得ぬこともある。この場合には屢々普通の流産よりも強い出血を起して生命に關わる程の危険を來すこともある。その上殊にこの胞状鬼胎の出産の跡には癌腫よりもまだ

たちの悪い腫れ物が出来ることがあるから、胞状鬼胎の出産後に貧血が恢復せぬか、貧血が次第に強くなつて來るか、或は出血が全く止まらずに繰返して來るようなことがあれば勿論のことであるが、さもなくとも一定の間隔を置いて醫師の診察を求めて、その監視を受ける必要がある。この出産は大抵妊娠二ヶ月から四・五ヶ月位までの間に起るものが多い。

子宮外妊娠

子宮外妊娠と云ふのは卵管の中で受胎した卵は卵管から下つて來て子宮に宿るべきはづであるに、卵管の途中に何か故障があれば、子宮まで下ることが出來ずに卵管の中に止められて、そこに宿つて漸次に成長するものが最も多い。卵管以外の部分にも宿ることがあるが最も屢々見るものは卵管の中え宿るものである。その通過を妨げる故障は様々であるが多くは卵管の病氣か、發育の不充分であるか、その周囲の部分に在つた病氣のために卵管の管が強く曲げられたり狭くなつたりして、受胎卵の通過を妨げるためである。

子宮外妊娠の容態には多少の差はあるが、多くは月経が少し遅れるか、一・二ヶ月止まつて後に強い下腹の痛みがあり、時にはそれが回復することもある。殆んどそれと同時に或は前後して餘り多くない出血を伴うことがある。その痛みは通例下腹に感じるのであるが、時によつては胃部に痛みを感じたり、脇腹の方に痛みを感ずることがあつて、胃痙攣や盲腸炎などと誤ることもある。時によつては強い痛みと共に氣を失うて倒れることもある。その時には多く顔色が青ざめて著しく貧血したように見え、脈も細くて數が多くなることが通例である。劇しい痛みや貧血を起して來る原因は、子宮外妊娠が大抵妊娠二・三ヶ月頃になると卵管の腹の中の方へ開いて居る口から、恰も通例の妊娠のときに流産するに似た狀況になつて押出されることがある。その時には通例腹の中へ出血する。今一つは妊娠して居る部分の卵管が次第に卵の成長と共に薄くなることと、發育する卵の特殊の作用のため、卵管の壁の中に出血が始まつて、遂にその出血のために薄くな

つた卵管壁が破れるようになる。その時には破れた傷から出血して腹の中へ出る。それ等の出血は急に起ることが普通であるから、その時に劇しい痛みを感じ、それと共に貧血の容態も起るのである。このような出來事が起れば胎兒は大抵死亡するものであるが、稀には成育を續けることもある。

その出血した血液は時を経れば固まつて瘤のようになることもあり、膿を持つこともある。その瘤のようになつたものが腹腔の方や、腸の中や、腹壁や、膈などに破れて血膿が出ることもあり、胎兒が成長して既に骨が出來てから後であれば、それと共に胎兒の骨が一つ一つになつて出て來ることもある。それが腹腔の方え破れたときには時によつては腹膜炎を起して生命を失う危険がある。他の部分え破れたときには屢々仕合せな経過を取ることもある。或は卵管から出た胎兒がそのままに腹腔の中で成長することも稀に見ることがあり、極めて稀には手術によつて生きた小兒を得ることもある。然し多くは腹の中で死

亡し、又は取出した後に死亡する。かかる胎兒の腹の中で死亡したものが數年間腹の中に瘤のようになって残つて居ることもあり、その中には一部分又は全部が石のように固くなることもある。子宮外妊娠のときの経過は多種多様であるから、詳しく述べることは複雑になるから省略する。

子宮外妊娠のあることを、前に述べたような劇しい容態の起らぬ以前に都合よく診断し得たときには、手術によつてその妊娠して居る卵管を取り除くのであるが、劇しい容態が起つてから後に手術するよりも手術の結果の宜しいことが多い。然し大多數の場合は劇しい容態が起つてから後に醫診を乞うことが多いのである。その場合でも大多數は手術を行う方が安全なのであり、またなるべく速かに手術せねばならぬことが多いから、そのような場合には相談などに時を移さずに速かに決心して適當な時期に手術を受けるようにせねばならぬ。

妊娠子宮の後屈

妊娠して居る子宮が後方に曲つて居る即ち後屈して居ることがある。これは多數の場合では妊娠が進んで子宮が大きくなると共に正位である前屈になつて、骨盤から腹腔の方へ現われて來るのであるが、時によつては、妊娠が進んでも後屈のままであることもある。そのときには妊娠三・四ヶ月頃になると子宮が次第に大きくなつて骨盤の中を全く占領するようになつて、終には骨盤の管の中へ全く嵌り込んで動きが取れぬようになる。そのときには始めは兩便の通利が不充分である位の容態であるが、全く裕りのない位まで嵌り込むと全く兩便の通利がなくなり、甚だしいときには大便も全く通ぜず、小便の方は膀胱に溜つて、時には膀胱の破れるまでになることもある。若しその程度にまで達するときには屢々生命の危険がある。そのようにならぬ中に早く手当をする必要がある。

この妊娠子宮の後屈は妊娠以前から子宮後屈のあつた婦人が妊娠した時に多く見るものであるが、妊娠の初期に診察すれば位置を正しく

して、正位に保たせるように處置をすることが出来ることが多い。後屈した子宮は妊娠し難いものではあるが、全く妊娠せぬとは限らぬものであり、また稀には後屈して居るに關わらず頻繁に妊娠することさえもある。それ故に妊娠して居るときに後屈を伴うて居れば無論のこと、妊娠して居らぬときにも後屈に對して適當の處置を受けて置くことを要する。それは今述べたような危険を豫防する考えからである。

妊娠中には尿に異常な成分の出て來ることは、甚だ稀なことではない。それは母親の身體の働きが妊娠のために著しく増すことを考へても容易に理會し得られることであるが、その中でも多くの人が心配するのは蛋白の現われて來ることである。蛋白の現われて來るのは腎臟の働きの故障のあるためであることが普通であるが、猶ほその他の異常成分が現われることもある。

蛋白尿

妊娠中の尿に蛋白の現われることも臨月に近づいてからで、しかも

極々少量であれば餘り心配ではないが、注意は加えねばならぬ。若し妊娠の早い時期からそれを見るようであれば、その経過を注意して適當の時期に検尿を反復して、その増減を監視し、必要があれば適當の治療を要する。

腎臟炎

若し妊娠以前から腎臟の病氣があつたり、前回の妊娠のときに腎臟の故障のあつた妊婦では、その経過を醫師によつて監視せられてその指圖に従うて養生をすることが大切である。

凡て妊娠中に腎臟に障りがある場合には藥劑などを用いることも大切ではあるが、養生の方法を守らねばならぬ。殊に運動の過度になつたり、寒さ、暑さや、濕氣などを受けぬようにすることなどに注意し、時としては食物にも特に注意を拂わねばならぬことがある。

妊娠中に腎臟に故障があつて蛋白尿があるようなときには同時に顔面殊に臉やその他全身殊に下脚にむくみが來ることがあり、尿の分量

脚氣

も減ずることがある。

また妊娠中にその他の異常成分が尿中に現われることもある。それは醫師の注意と指圖に従うて薬用又は養生をせねばならぬ。

女子が脚氣に罹ることの最も多いのは妊娠中か或は産後である。殊に妊娠中にその容態が分らぬ位であつたものが産後に著しく進んで來ることがある。若し下脚や、指先や、口の周圍などにしびれを覺えたり、同時に下脚などにむくみがあつたり、動悸のするようなきには、なるべく早く治療を受けねばならぬ。既に世人も知つて居る通り、母親に脚氣のあるときには新産兒に脚氣を見ることが少くないから注意せねばならぬ。時によつては既に胎内に於て胎兒に脚氣を起して居ることもあり、殊に母親の方には脚氣の容態は不明である位で、既に新産兒に脚氣の容態を起すこともあるから、新産兒の顔色が悪く、力がなく、乳を多く飲まず、乳を吐き、息遣いも悪く、泣聲がかれるようなきには注意を要する。

新産兒の脚氣

脚氣に罹つて居る母親の乳は新産兒に與えぬようにすることもあるが、然しその母兒兩方の容態によつては経過を監視しながら、或は治療をしながら授乳をさせることがある。それ等の點に就いては醫師の考えに任せねばならぬ。

微毒

兩親ともか、或はその何れかが微毒に罹つて居るときには胎兒が微毒を持つて生れることが通例である。然し微毒は今日では診断も容易になり、治療の方法も進歩したから全治の望みがあるから、兩親が微毒に罹つたことがあれば、妊娠するよりも前に治療して置くことを要する。若し妊娠してから後にその感染したことを知つても治療を加えることを要することは勿論である。微毒を持つて生れた小兒は虚弱であつたり微毒に基く種々の病氣に罹るものであり、その上、前にも述べたように流産や早産をして早く生れたときには薄弱なことがある。またその小兒が成長した後には子供が出來れば、それにも微毒を遺傳す

淋疾

ることが通例である。

同じく性病の一つである淋疾に母親が感染して居るか、妊娠後に感染するときには母親の性器に病氣を起して流産・早産を起したり、或は産後に産褥熱などを起すこともある。またそのために新産兒に眼病を起すこともある。それを豫防するためには出産の直後に眼薬をさすことがある。これは主には淋疾のために來る眼病を防ぐ目的であるが、今日では淋疾の有無に関わらず必ず行うべき處置の一つになつて居る。この方法の基礎をなしたものはドイツ人クレデの研究であつて、種痘法と殆んど匹敵する位の大きな人助けである。

妊娠中に起る病氣

妊娠中には妊娠して居らぬときに起る病氣はどれでも皆起り得るものである。然しその中でも腎臓の故障や、脚氣などは平常よりは起り易いものである。

また病氣の種類によつて妊娠中にはその経過の悪くなる傾きのあるものもある。例えば喉頭結核などは殆んど常に妊娠のために経過を悪くすると考えられて居る。肺結核なども時によつては速かに進むこともあるが、時によつては妊娠してから後に肺結核の経過のよくなることもある。それ故に肺結核などの場合には醫師がその経過をよく観察せねばならぬ。その上で必要のあるときには胎兒を早期に生れさせるようにすることがある。即ち所謂人工流産である。然しこれは胎内に居つて生長しつつある胎兒の生命を犠牲にして母の病氣を軽くしようとするものであるから、輕々しく行つてはならぬものである。先づ養生の方法を守り醫療を受けて、それが何れも效を奏せぬときに、醫師の判断で餘儀ないと考えるときのみ行うべきものである。両親や親族のものの希望ばかりで行うべきものではない。若しこれを醫學上から見て適當して居らぬときに行えば、それを行うた醫師は勿論それを希望した人々などまで罪人にならねばならぬことがある。

妊娠の初めの頃丁度つわりのある頃に、毎日軽い体温の上ることを見ることがある。これを屢々肺結核の軽いものに来る熱ではないかと考えて心配することがあるが、常にそのためであるとは云ひ得ぬものである。これも大抵つわりの止む頃になれば平温になることが多い。この微熱の出る原因はまだ明瞭にはなつて居らぬから、今日では漫りに心配するに及ばぬものである。

産見制限

この序に一言して置くのは、世間で**産見制限**と云うて居るのは人工流産のことではなく、妊娠せぬこと即ち受胎をせぬようにすること、更に別の言葉で云えば、避妊と云う意味のことであるから、まちがえてはならぬ。これも前に述べた通りに、一定期間性交を避けることによつてその目的を達せられるものであり、様々の器具や薬品などを用いては危険が起らぬとは云へぬ。

人工流産

人工流産の方は今述べたように、母親の病氣のときに醫學上餘儀な

いと認められた場合にのみ行うべきものであり、若しこれを濫用することは人道上から見ても法律上から見ても罪惡である。

傳染病

高い熱を伴う病氣、殊に**傳染病**に屬するものなどの中には、時によつて胎内で胎児が死亡することがあつたり、或は流産・早産などを起すこともある。産後の経過も不良なことがある。

心臓・肺・肋膜の病氣等

心臓の病氣・肺・肋膜などの病氣のときにも同じようなことがある。強い下痢を伴う病氣などの中には流産・早産などの起ることもある。正期の出産のときにもこれ等の病氣のために時によつて様々の危険を起すことがある。

前に述べた腎臓の故障や、脚氣のような病氣などの際にも、胎内で胎児の死亡することがないではないが、流産・早産を起すこともある。殊に腎臓の故障のときには時によつて痙攣を起すこともあり、脚氣のときには所謂衝心の容態を起すこともある。

外科手術

その外の病氣のことは略して置くが、病氣の種類によつては、外科手術を必要とすることがある。それ等の中には妊娠の方に餘り危険を惹き起さぬものもあり、割に危険の多いものもある。これ等の場合にはいつも醫師の意見に従はねばならぬ。時によつては急いで手術を行わねば時期を失うものもあるから、そのような場合には躊躇せず決心せねばならぬ。

外傷

外傷などの場合にも、その部分と程度とによつて、妊娠に及ぼす影響は様々であるから、これを一々ここには述べぬが、これもなるべく早く醫療を受くべきものである。

胎兒の發育不全

母親の體質のために起ることもあり、病氣のために起ることもあり、またその原因の不明であることもあるが、胎兒の發育の不充分なことがある。その發育は身體の全部の育ちが悪かったり、一部分だけが發

畸形

育不全であることもある。甚だしいときには、肉の塊りと思われるようなものの生れることもあり、手足の指が足りなかつたりすることもある。多く見るものは所謂三ツ口(兔唇)である。その他に肛門の塞がつて居るものもある。また手足の指などの過剰であるものもある。またときによつては双胎であつて、その二つの胎兒が身體のある部分でクツキ合つて居ることもある。それ等の畸形の出来る原因は不明であることが多いが、その出來方の説明などは、中々理會し難いから略して置く。然しそれが悪業の報いであると言ふような憶説は取るに足らぬことである。

臍緒の異常

臍緒は通例五・六十糎の長さであるが、時によつて異常に短かつたり、長かつたりすることもあり、稀には結び玉になつて括られて居ることがあり、或は胎兒の頸部に巻き付いて絡んで居つたりすることがある。

羊水過多症

胎水（羊水）の分量も異常に少いこともあり、異常に多いこともある。異常に多いものは**羊水過多症**と云うて居り、妊娠の五・六ヶ月頃より後に心付くことが多い。殊に、急にその量の増すものは心付き易い。そのために腹部は異常に大きく、妊婦は苦痛が多く、時によつては早期に出産することがあり、その結果胎児はまだ發育が充分でなくて成育の見込が少かつたり、母親の方には、出産のすぐ後に子宮の収りが悪いために、多量の出血などを起す危険が多い。然しこれも醫治が效を奏して、その増量した胎水が次第に減量することも望まれるから、醫治を受けねばならぬ。羊水過多は屢々雙胎のときに起ることがある。その雙胎であることは胎水の多いために診断し難いことがある。胎水の少量に過ぎるものもあるが、そのときには或は胎児の身體が互に癒着したり、胞衣と癒着するようなこともある。

前置胎盤

前に述べた胞状鬼胎も胎盤になるべき部分の異常な變化を起したものであるが、その他にも胎盤に異常を起すことがある。その一つに前置胎盤と稱えるものがある。

前置胎盤は子宮の袋の口のところを被うて胎盤が出来るものであつて、その出來方によつては**劇しい出血**を起して來ることがあり、時によつては生命の危険をさえ伴うことがある。これは不時に起る出血が最も多く現われて來る容態である。その出血の量は一定せぬが、多くの場合には相當に多量であつて、それに多少の下腹の張る感じや、痛みなどがあることもあり、引續いて出産があることもある。これは胎盤が出來てから後には何れの時期にも起ることがあるが、多數は妊娠の終りの二・三ヶ月に起るものである。

それと似た容態のものは**正常の位置に在る胎盤の早期剝離**である。これは多くは急に子宮の部分に劇しい痛みを覺えて、それに續いて陰部からの出血がある。

正常位置胎盤の早期剝離

出

産

七三

この二つの場合には屢々胎兒の死亡を見るものである。これは胎兒の生存に必要なものを供給する場所であるところの胎盤が子宮から剝れて、その供給の道を絶たれるからである。

この二つのものは何れも生命に關する程の危険を來す恐れがあるから、なるべく早く醫療を受ける必要がある。

妊娠中には陰部からの出血はないことが普通であるから、出血はその分量の多少に關わらずすぐに醫療を求めることが安全である。その中でも多いものは子宮口のただれである。そのただれも單純なものは癒るには相當の期間を要するが、出血の分量も通例多量ではなく心配の少ないものである。

心配せねばならぬものは癌腫である。妊娠のときに癌腫のあることは稀なものであり、その上早く醫師の診斷が付けば大抵は手術の成績

妊娠中の出血

癌腫

も良いものであるが、診察を受けることが後れたりすれば妊娠中には進み方が早くて手遅れになることもある。

子宮の口元に米粒か豆粒位の小さな瘤が出来て出血することもある。これも一種類ではないが多くは醫治によつて容易に治すことが出来るものである。その他の出血を起して來るものには流産や、早産や、胎狀鬼胎や、子宮外妊娠や、前置胎盤や、早期剝離などのようなものがある。何れも既に述べた通りである。

どの場合でもなるべく早く醫治を受けるようにした方が安全であることは云うまでもない。

子癇と云う病氣もある。これは多くは豫め腎臟の故障のある容態、即ちむくみがあり、尿の量が減じ、尿に蛋白が出ると云うような容態があつて、その後に頭痛、めまい、嘔氣などがあつて起るものが多いのであるが、時によつてはそのような前兆が少しもなくて突然起つて

子癇

出血

七五

來ることもある。

これは始め顔殊に口の周圍に起り、次で全身に及ぶ痙攣である。大抵は一・二分間ひきつけて後に静かになるが、暫くの間は眠つたような状況でいびきをかいて氣を失うて居ることが多い。このひきつけが繰返して來れば氣の確かになるまでの時間も長くかかる。胎兒は母親の一回のひきつけの後に胎内で死亡することもあるが、十數回のひきつけがあつても無事であることもある。

母親の方も矢張り生命を失うことがあり、稀には一回のひきつけのために死亡することもないではないが、數十回のひきつけがあつても生命は無事なこともある。何れにしても生命の危険の多い病氣である。速かに醫治を受けることの必要であることは云うまでもないが、前兆と思はれる容態の内に豫防することも大切であるから、その頃に既に醫治を受けることを要する。

このひきつけの起つたときに舌を噛むことがあつて、口中に出血し

たり、唾液とともに血が流れ出ることがある。それを防ぐには布片を拇指位の太さに巻いたものか、細い木片に布片を巻付けたものを奥齒の間に挟むことが宜しい。そのときに挟むてやる人の指を噛まれぬように注意せねばならぬ。

その外には醫師の來るまでの手當としては周圍を静かにして、呼びかけたりせぬようにし、足音も靜かにして物音のせぬようにし、室内もなるべく暗くして、眩しい光などを避けるようなことに注意せねばならぬ。

前置胎盤や胎盤の早期剝離は大抵突發して來るから容態が起つてから醫治を乞ふことの多いものであるが、子痲は前兆のあることがあるから、そのときから用心して病院か産院のようなところに入院して豫防の方法を講じて、都合よくそれを避けることの出来る場合もある。

子痲は妊娠中に起るものが最も多く、殊にその第六ヶ月以後に起るものであり、九ヶ月又は臨月になつて起ることが多い。然し出産の間

陣痛、腹壓の強弱

や、産後に起ることもある。

出産に對して陣痛と腹壓とが胎兒を押し出すために必要なものであることは誰も知つて居ることであり、その力が強過ぎれば出産の経過は速かになり、その力が弱過ぎれば出産の経過の延びることも分りきつたことである。出産の速過ぎることは必ずしも幸福なことではなく、相當の準備を経て、順序よく生れることが最も望ましいことである。餘り出産の経過の延びることも様々の容態が起つて来る危険があり、殊に母親の疲勞や、胎兒の方の影響などのために様々の危険が起る虞れがある。世間では出産の異常に速かに経過するようなきには随分喜ばれるが、何等他の異常を起さずに速かに経過したときには無論喜ばしいことには相違ないが、かかるときには様々の危険が起らぬとは云えぬのであるから、無事に済むまでは安心は出来ぬものであり、前回の分娩が異常に速かであつたときなどには、その次の分娩のときに

眠り腰

は警戒を要するものである。その一つには、出産間近になつてからは外出などをせぬこと、出産を促すような動作のないようにすることを要する。その他には出産のときに速かに醫師の監督を受けることが出来るように手配して置くことが必要である。

俗に眠り腰と云うて次第に強くなつて来た陣痛が弱くなり、産婦も疲れを感じることがある。その時には次第に陣痛の間が隔つて來ることもあり、或は頻繁に起つて來ることがあつても、その力は弱くなるのである。これは多くは體力の弱い人、殊に腹部の筋肉の力の弱い人に見るものである。それ故に婦人は大きな筋肉労働はせぬにしても、出産の時の筋肉労働には堪え得られる程度に丈夫になつて置いて貰いたいものである。そのためには必ずしも運動競技の選手になるまでの必要はないが、筋肉の練磨殊に呼吸筋と腹筋との強健を謀るような運動を、平生から怠らぬようにしたいものである。學校教育を受けて居る間は相當の體育を受けるにしても、その後の家庭生活に於て體育的

婦人の體育

出
産

七九

Ant-lord and Kri Sapp's granular

の練習を中止することは誠に遺憾なことである。婦人のしとやかさは最も望まれるところであるが、本當のしとやかさは強健な婦人に於てこそ望み得られることであつて、薄弱な體質できやしやな體の人には望まれぬことである。然し多數の人は薄弱なきやしやな、醫學上からは腺病質とても云いたいような體質の方が美人とか麗人とかの標準になつて、事實上強健な體質の方を太つて居るとか、巨大であるとか云う批評の下に好まなかつたことが、婦人體質を薄弱に傾かせる一つの原因になつたものであろう。今日ではこの考えを持つ人は餘程少くはなつたが、まだ長い間の誤つた考えは全く取り去られぬようである。

運動の方法

體育的に行ふ運動の方法は猶ほ研究を要するが、割合に容易く實行の出來そうな方法は、仰むけに平臥して上體を高めるとか、兩膝を閉ぢてその外側に兩手を當てて強く押えて、それに反抗して膝を開くとか、その反對に膝を少し開いてその内側に兩手を當てて膝を閉ぢると

云うようなことを試みる。呼吸運動としては徐々に深呼吸を行うようにするもので、直立のときには兩腕を體側から兩側方に開いて、肩と水平にまで上げると同時に、次第に空氣を吸込んで(吸氣)その後次第に腕を體側の方に下げるとともに息を吐き出す(呼氣)。兩膝で坐つて居る位置であれば兩腕を前方に延ばして、それを伸したままに兩側に廣げると同時に吸氣を行い、腕を以前の位置に戻すとともに呼氣を行う。仰むけに臥して居るときには膝を少し曲げて先づ上體の兩側に腕を引き付けて、それを上の方へ伸ばし上げるとともに吸氣を行い、元の位置に下げるとともに呼氣を行う。このような運動を毎日二・三回各運動を繰返して五分乃至十分位も行えば、かなり有效である。この運動は特に流産の傾向でもあるような場合でなければ、妊娠中に行うても差支えなく行われ得るものである。一日の度数や各運動を続ける時間などは人々によつて差異のあることは云うまでもない。平日には此頃世間で行われて居るラヂオ體操なども、自分に適當な程度に行

骨盤の廣狹

えば、實用の出来るものである。

骨盤の管の廣さが餘り廣過ぎるときには出産の経過は速かである。若し狭過ぎるときには出産の経過は手間取るが、その狭くなり方が甚しいときには全く通過し得ぬこともある。それでもその狭い度合が軽いときには胎兒の發育が過度に大きくないか、陣痛や腹壓が強いときには無事に出産することもある。普通に臨月の程度にまで育つた胎兒の全く通過し得ぬときには、止むを得ず腹壁と子宮壁とを切開いて胎兒を取出すことがある。これは**切開分娩(帝王切開術)**である。骨盤が狭いか或は他の原因の爲に出産の困難であるときには、状況に應じて母兒何れかの生命に危険を示すようなときに切開分娩又はその他の手術を行つて胎兒を牽き出すことがある。時によつては胎兒を犠牲にして母親の危険状態は救わねばならぬこともある。今日では手術の方法と、それを用いる時期を定めることがともに進歩して來たから手術の

切開分娩

骨盤の測定

結果も次第によくなつた。殊に切開分娩の成績などは著しくよくなつたから、以前のように開腹をして胎兒を取出すことを恐れるに及ばぬ。**骨盤の狭いときに起る容態は様々であつて、到底この書物などに並べ舉げることが出来ぬばかりでなく、理會し難いことが多いから略して置くが、骨盤の大小を定めるには通例骨盤を外部から測つて見て内部の廣さを想像し、その上内診をすれば大凡その大きさを推定することが出来る。**その上で必要のあるときにはエックス線を用いてその大きさを測つたり、また出産のとき、又はそのすぐ前であれば骨盤を胎兒の一部(多くは頭部)との適合するか否かを定めることが出来る。**骨盤の狭いときや、胎兒の發育が大き過ぎるときや、胎兒が骨盤の管の中を通る状況が宜しくなかつたり、子宮の袋の口やその他の胎兒の通過する部分に妨げがあつたりするために、出産の進み方が鈍く、或は殆んど止まつたようになつて、その上に陣痛が強いと子宮の袋が破れることがある。**稀には子宮壁の薄いためや弱いために破れること

子宮破裂

もある。それは**子宮破裂**と稱えて居る。この場合には、多くは胎児は死亡し、母親の方も大きな危険の状況に置かれる。寸時も早く醫療をすれば助命することもあるから躊躇してはならぬ。

出産を手間取らせるものは骨盤が狭かつたり、陣痛や腹壓が弱かつたりするためであることは少からぬものであるが、胎児の發育し過ぎて居るときにも同じことである。その反對に發育が不十分なときには速かに経過するはづである。發育し過ぎて居るときには胎児の骨もよく發育して硬くなつて、元來出産のときには、胎児の頭骨がその繼ぎ目のところでずれ違つてかさなり合つて、その上に幾分ひづみが出来て、骨盤の管の中を通り易くなるべきであるのに、それが出来難くなつて、大きさのためばかりでなく、そのためにも通過が困難になることがある。それ故に出産の難易から見れば胎児の發育が不充分であれば出産は容易いと云う道理である。

胎児の骨盤の中の通り方(胎児の位置)

頭産

逆産

横産

まだ外に出産の難易に係ることは胎児の頭が先きに出て來るときでも、その出方によつて難易の差がある。凡ての出産のときに最も多いのは**胎児の後頭**が最も先に出て來るのであつて、そのときが頭の周圍の最も小さいところで骨盤の管の中を通るのであるから、出産が容易であり、その他の部分が出るときにはその状況によつて難易の差がある。**額**の部分が出るときには最も困難であるが、**顔**を先に出して來るもので下顎を後方に向けて出て來れば、自然の力だけでは生れ得ず手術をせねばならぬことが普通である。

逆産即ち臀部が先に出て來たり、脚が先に出て來たりするものは、母親の方に對しての危険は正常産の場合と大差はないが、胎児に對しての危険は著しく多い。そのために屢々手術をせねばならぬようなことがある。

横産は胎児の發育が悪いか、胎内で死亡した胎児の生れる時の他は

出産

破水の時期

正期産などでは自然産は望まれず、常に手術を必要とするものである。出産のときには子宮の袋の口が相當に開いた時に胎水が下りる。即ち破水するものである。それが少し位早く下りても、少し位遅く下りても格別の障りはないものであるが、時によつてはまだ出産の始まつた容態を起さぬ前に下りることがある。そのときには多くは出産は長びくものである。稀には存外速かに經過することもある。胎児が生れるときまで胎水の下りぬときにも、稀に強い出血などを伴う危険な容態を起して來ることもある。

臍緒の異常

臍緒の長過ぎるものは多くは大きな障りを起さぬものであるが、餘り短いときには胎児が下つて來て生れ出るのを妨げることがある。長過ぎるものでも胎児の身體殊に頸に巻き絡んで居つて、短い臍緒と同じように妨げを起すこともある。臍緒が結び玉を作つて堅く結ばれて、

そのために胎盤と胎児との間の血の通路を止めると胎児の死亡を來すことがある。

臍緒が胎児よりも先に垂れ下つて來ることもある。そのときには臍緒が胎児の頭などで強く壓へ付けられるために、その壓へられて居る時間が長くなれば胎児が死亡することがある。

胎児が生れてから後産(胞衣)が生れるまでに少量の出血があることが通例である。それは胎児が狭い場所を通るから、無理に擴げられたために傷が出來て、出血するのである。然し時によつてはそれ以外に今まで子宮の中に胎児が居つたものが生れて、子宮が急に少さくなるために、子宮に附着して居つた胞衣の一部分が剝れ始めて、その剝れたところから出血することもある。胞衣の剝れ方によつてはこの出血は全くないか、あつても極少量であるが、剝れ方が縁の方から始まるか、或は子宮の收りがよくないときには、この出血はかなり多量であ

出産の全経過の時間

つて速かに醫師の手當を受けぬと生命に關する危険を起すこともある。

出産の全経過の時間は人々によつて差があり、同じ人でも毎回到に差がある。然し一般に云えば第一回の出産には多くの時間を要し、第二回からは短くなるものであるが、必ずその順序であるとは限らぬ。自分が餘程以前に調べたものでは、第一回の分娩には平均十五時間餘であり、第二回以後の分娩の平均は七時間餘である。然しこれは多數の出産を平均したものであるから、長いのは百時間以上もかかったものがあり、短いものは痛みが始まつたかと思うと數分時で済んだものもあるから、第一回の分娩では二十四時間位を要しても決して異常に長い時間を要したとは云い得ぬのである。この調査は何れも正常産と見るべきもののみ就いて調べたのである。

成熟した新産兒

出産した小兒はその成熟して居ると否とに拘らず**新産兒**と稱えて居

る。成熟して生れた小兒は、**身長**が約五十糎、**體重**が約三千瓦であるが、これも一定して居るものではない。多くの場合には第一子のときには幾分か少さく・軽く、第二子以後は次第に大きく・重くなり、第四・第五子位のところ**が最も大きく・重いのを常とするが、兩親殊に母親の體格・體質などによつても差があり、その他にも生れた小兒の大小や輕重を支配する原因は様々であるから、その原因を明かにすることの出来ないことがある。**

月満ちて生れた新産兒は成熟して居る筈であるが、時には過熟であることもあり、或は發育の不充分なこともある。それは身長や體重などでも幾分か推定することが出来るが、その他にも醫學上からは様々の要點を調べて成熟して居るか否かを定める標準にする。その一・二を擧げて見れば、**身體が丸味を帯びて太つて居ること、頭髮の長さ、骨殊に頭骨の硬さ、ひよめきの大きさ、指の爪の長さ、身體の皮膚の脂肪の付き方、うぶ毛の生え工合、その外の發育状態などを調べるの**

早産兒

である。然しこれ等の觀察點の何れもは参考に供せられるものであつて、その一つだけで定められるものではない。

月足らずで生れた新産兒即ち早産兒でも成熟の徴候をかなり多く揃えて居ることもあり、月満ちて生れた小兒でも發育の不充分なものが無いではないから、月満ちて生れたか、月足らずであるかを決定することは困難なことがある。

發育の不充分な新産兒を育てるには成熟した新産兒を育てるよりも注意を要することの大きいことは誰れも知つて居る通りであるが、大體を云えば發育の不充分な新産兒に就いては、冬などでは冷えぬようにすることと、榮養とに注意を要する。冷えぬようにするにも、着類や蒲團を重ねるよりも室を適度に温かくすることが大切であり、授乳をするにも一度に飲む分量が少いから回数多くしたり、乳を吸う力が無いために匙を用いて入れてやらねばならぬこともある。口中や皮膚の不潔にならぬようにし、ただれなどの出来ぬようにすることなど

出産の終了

出産時の出血

にも注意を要する。

一般に云へば妊娠の月の進んで居る程育てよいことは云うまでもないが、時候の寒いときには温かいときよりも育て難いものである。然し注意を充分にして育てれば時によつては第七ヶ月の終り頃に生れた小兒でも無事に成育することが出来ぬことはない。

出産が終つたと云うのは後産(胞衣)が下りてから後である。胞衣の下りる前には胎兒の生れるときよりも軽いが矢張り陣痛が起つて、すぐに下りる。或は三・四回も陣痛が繰返してから下りることもあり、そのときには多少の出血がある。それは胞衣が剝れるときに起るもので、少いときにはその分量は百瓦か二百瓦位であるが、多いときには三・四百瓦位までのがあつて胞衣とともに出る。胞衣が出た後にも少しづつの出血が続く。これ等の出血が凡そ普通の分量を超えぬときは少しも心配はないが、大量であれば處置を要する。そのときに

醫師が側に付いて居れば、すぐ手当をすることが出来るが、大量の出血が始まつてから醫師を招くのであつては間に合はぬことがある。その出血の分量や、出血のために起る容態も人々で差があるから、病院や産院のようなところで出産をすることは、これ等の出血に伴う容態を見て居つて、適當の處置をしようと云う點から見て安全なことである。大量の出血があるかないかと云うことは豫め知ることの出来ることもあるが、多くはそのときまで不明である。そのような大量の出血は初めての出産と數回を重ねた出産と比べれば、度重さなつた出産の方に多いものであるが、初めての出産でも大量の出血がないとは限らぬ。病院や産院での出産で大量の出血のために生命を失うた場合は甚だ稀であるが、自宅で出産をした場合に大量の出血のために不幸なことのあつた實例は全く少いとは云われぬ。世間では初めての出産を大切にせられるが、事實は出産の度重さなるとともに増す危険が出血ばかりでなく、その他にも少くはないから、出産は何回目でも初めてと同じ

く考えて用心せられることが必要である。

多胎妊娠

多胎妊娠と云うのは二つ以上の胎兒が同時に宿つて居るものを云うのである。最も多いものは**雙胎**(ふたご)である。今日まで確かであると思われるのは六胎までの妊娠である。然しこゝでは雙胎のことを述べることにする。

なぜ雙胎が出来るかと云う理論は略して置くが、その胎兒が二つとも男性であり、或は女性であることもあるが、時によつては一つは男性、一つは女性であることがある。世間ではその男女各一人づつものものを畜生兒などと云うて居るが、それは何も謂われのないことである。男女各一人づつであるときには必ず二つの卵子に受精したものであり、同性のときには二つの卵子に受精した場合もあるが、一つの卵子

多胎妊娠
雙胎

に受胎したのではあるが、その卵子が普通には一個づつしか具えて居らぬ筈の卵核を二つ具えて居つて、その二つの核に受胎が行われたものである。その詳しいことは理會し難いと思われるから略して置く。その關係から一卵性の雙胎と二卵性の雙胎とを區別して居るが、その區別は生れてから後に胞衣の性質を調べて見れば區別し得るものであるが、實際上の問題には格別必要のないことである。

妊娠中には單胎妊娠の割合よりも子宮は著しく大きくなることが多く、従つて妊娠の苦痛も多いことがあり、色々の容態を起すこともある。殊に腎臟炎や、羊水過多などを起すことがあり、出産時にも陣痛が弱かつたり、出産後に出血が多かつたりすることが多い。

二つの胎兒は何れも頭産であることもあり、二つとも逆産のこともあり、或は一つが頭産で一つが逆産であつたり、二つとも横産であつたり、一つは横産で一つは頭産又は逆産であることもある。

出産の経過は陣痛の弱いことが多いために長びくことが多い。然し

多くの場合には一つの胎兒が出た後には、少しの時間を隔てて第二番目の胎兒が生れるものである。然しその隔りが二・三日もあつたこともある。

生れた小兒は同じ位の發育程度であることもあるが、多少の差があることが多い。時によつては一つの胎兒は他の胎兒のために押し潰されたようになつて小さく平たくなつて居ることもある。

雙胎の妊娠は既に妊娠中に診定せられることが普通であるが、時によつては出産時まで心付かぬこともあり、或は一つの胎兒が出たために出産は終つたと思つて跡の始末などをして居るところえ、第二の胎兒が生れて來るので驚くこともある。

世間では雙胎を耻すべきもののように考えて居る人が多いが、別段何も耻すべき理由はないのであつて、前に述べた排卵のときには一つの卵子が出るのが普通であるものが二つの卵子が出たときに受胎をしたのであつて、別段そこに耻すべきことがなくとも起り得るものであ

る。一つの卵子の中に二つの卵核のあることも決してないことではないのであるから、これとても少しも耻ずることはないのである。

人類で雙胎の出産はどの位の割合にあるかと云うことは全世界の平均を見ることは出来ぬが、アチコチで調べたものを参照して見ると總ての出産の四・五十回から、八・九十回に一回位の雙胎がある。三ツ子・四ツ子になると著しくその割合が減じるものである。

ふたごはその發育の程度が同じ位であるときには、屢々その區別が出来ぬ位によく似て居ることが多いから、多くは手頸か足頸に細い紐などを寬く結んで區別して置くことがある。若しほくろのような特徴があるか、發育の程度に著しい差があればその必要はない。

ふたごの兄弟・姉妹の順序は如何に定めるかと云うことは時々議論があるが、これは云うまでもなく先きに生れた方が兄か姉であり、後に生れた方が弟か妹である。これは法律の上から見ても正しいことであり、學問上から考えても正しいことである。時々誤つた考を持つて

居る人は動物などの子宮の二た股になつて居るものを見て、その奥の方に宿つて居るものが先きに宿つたものであらうと考えて、出産のときは口元のものから先に出るから、その方が宿つてからの期間は短いてあらうと考えたものであると思われる。然し他の動物の場合でも必ず奥の方に宿つて居るものが先きに宿つたのであると云う證據はないのであるから、今日では人類では先に生れた方を兄又は姉とすることは決して無理なことではなく正當なことである。

産 褥

後産の終つた後には産婦の陰部などに血液やその他のものの付いたのを洗い或は拭うて、陰部に消毒した布片か綿などを當てて、陰部から流れて出る下り物(惡露)を吸取らせ、腹帯を整えて休息させる。後産の済んだ後は産褥に入つたのであり、産婦は産褥婦(褥婦)と稱える。

後陣痛

後産の終つた後にも時々軽い陣痛があることが普通である。これを後陣痛と稱えて居る。後陣痛のあるときには幾分か下り物が増すようなこともあるが、極少量の増加であれば心配はない。その量が著しく多いように感じたときにはそれを醫師か産婆に告げるが宜しい。

後陣痛は産後の子宮の収まるためには役に立つものである。然し後陣痛がなくても子宮は極めてよく収まつて居ることが普通である。多くの場合には胞衣の剥れた跡から幾分か續いて出て居る血が子宮の中に溜つて、それを外え押し出すために子宮が収縮して痛みを感じるのである。その痛みは新産兒に乳を與えるときにも感じることがある。後陣痛が餘り強いときには處置を必要とすることもあるが、軽いときには處置をせぬこともある。

陰部に當てた布片は下り物の模様によつて時々新しく取換えるものである。その間隔は一定しては居らぬ。出産の直後には割合に短かい間隔で取換えるが、次第にその時間は延ばされるものである。

悪露

また出産の直後には醫師や産婆が時々子宮の収りの状況を調べることがある。これは褥婦には煩わしいことであるが止むを得ぬことである。その代りにそれに煩わされぬ間の時間は安心して睡眠を貪つて出産のために苦勞をした疲れから回復することが出来る。

産後の下り物(悪露)は始めは殆んど血液のみかと思われるが、次第に粘液のようなものを混じ、血色も黒ずんで来て薄くなり、終に褐色になり、黄色になる。その變遷とともに分量も次第に減じて来る。その變遷の状況は各人によつて多少の差があるが、最も早くても二週以上を經過せねば黄色にはならぬ。多くは三週内外を経て黄色になる。この出血は前にも述べた胞衣の剥れた跡からの出血のためであるからその血色のなくなつたことは胞衣の剥れた跡の傷が次第に癒えて行くことを示すものであるが、黄色になつても傷は全く癒えたとは云い得ぬものである。その傷の全く癒えるには少くも四・五週を要するもの

子宮の縮小

である。

子宮の内面の傷が癒えて行くのと並行して、出産直後に胎児の出たために急に小さくなつて、子宮の最も高いところが略々臍の高さ位になつて居つたものが、その全體が小さくなつて、終には下腹の皮膚の下には觸れ難いようになる。それには少くも十日前後を經過せねばならぬ。多くは第二週の終りにもまだ少しは外から觸れ得られるものである。これが妊娠以前の状況と略々同じ位にまで縮小するには少くも五・六週を要するものである。

妊娠以前の状況に戻るとは云うが、普通は出産の度敷を重ねる程一回も妊娠せぬ時よりも少しは大きいものである。また子宮の口元にも出産のときに極度に伸ばされたために出来た小さな傷の癒えた跡が残ることが普通である。これが妊娠して臨月又は臨月近くに出産したことの證據になるものである。流産などではその變化が残ることは稀である。

乳汁分泌

初乳

子宮の全體が縮小して行き、その内部の傷が癒えると共に、乳房の方は乳汁を造る部分である乳腺が妊娠中から次第に發育して、初乳と稱えられる粘ばい水のようなものを準備して居つて、それが出産をする時と腺も猶ほ發育し、乳汁の分泌が始まつて来る。分娩直後にはまだ殆んど初乳ばかりを出して居るが、次第に初乳は減じて、乳汁の方が多くなり、終に乳汁ばかりを分泌するようになる。その乳汁のみになるのは大抵出産後二週から四週の後である。

初乳は俗に「あちち」と稱えて居り、多少その中に便通を促す成分を含んで居るから、胎糞などを排泄することを促す作用を具えて居る。世間で割合に廣く用いて居るまくりなども下劑としての効用が主であるから、そのような藥劑を新産兒に用いるよりは、天然に備えられて居る初乳を吞ませるようにした方が正しいことであり安全である。その上初乳には新産兒の榮養と體質とのために大切な成分が含まれて居

褥婦の休息

褥婦はその出産の後には出産のための労作からの疲れを回復せねばならぬから充分の休息をすべきである。それ故に出産が済めば産床を清潔にし、褥婦の着類を整頓して静かに眠らせることを要する。その間は世話をする人々は褥婦の状況に注意して殊に後陣痛や悪露の状況に注意せねばならぬ。

食事

食事は出産中には充分でないことがあるから、落付いた後には軽い食事を取らせる。粥・牛乳・葛湯・薄い粥などを用いる。その次のときには軽い副食物も加えるが宜しい。異常のないときで食欲のよいときには、平臥して居ることを考えて、消化し易い、軽いものを用いることに注意すれば次第に食事を進めても差支えはない。大抵一週の後には常食を取る位の順序にして與えるが宜しい。特に異常のある場合

るものである。

や食欲のないときには、その状態に應じて考察せねばならぬが、さもないときには餘り食物を制限すると乳汁の分泌の不足などを起すこともあるから、平生から好んで居るもの、慣れて居るものは、普通の食品であれば與えて差支えなく、その分量も濫りに制限を加える必要はないと思われる。西洋醫學の輸入せられた始めには無暗に制限をしたようであるが、それは宜しくない。また世間では傳説などに捉われて食忌として居る食品などもあるが、これも理由の明かでないものが多いと思われるから、今日では普通の食料品を適當に調理して用いるがよい。殊に肉食に偏せず菜食に偏せず、兩方を適當に調和することは最も望ましいことであり、乳汁分泌の豊富であることを望むためにも所謂混合食は最も望ましいことである。

運動

運動のことも妊娠中には注意する人が多いが、産褥に入ると安靜一方にのみ傾くように思はれるが、最初は前述の通り疲勞の回復を要す

床離れ

るのと、子宮の收りなどのためにも安靜にさせるが、出産の翌日位からは授乳のためには側臥を取ると云うように、次第に運動の度も加わるものである。床の上で坐つたり、床離れをしたりする日取りは褥婦の状況で一樣ではない。それには體力の關係も考え、子宮の收り工合、悪露の状況などを考察して定めて行くべきものである。一般に云うて今日では以前よりも早く床離れをさせる傾きになつて居り、時には極端なことを實行して居る人もあるようである。然しそれはどの褥婦にても同様に杓子定規に定めることの出来ぬものであるから同じ婦人でも毎回の産褥で、その床離れの日取には差があるべきものである。

體操

前に述べた呼吸體操や腹部筋肉の體操は褥婦の運動としても望ましいものであり、多くの場合には第三・四日頃より後には適當に用いさせたいものである。

便通

便通は産褥には秘結することが多いものである。便秘して直腸に便

尿通

が滞れば子宮の收りが妨げられることがあり、悪露も長びくことがある。それ故に自然に便通がなければ適當な時期に浣腸をしたり、坐薬を用いたりすることが多い。時によつて下劑などを用いることもある。浣腸は心地よくない、下劑は飲み悪いなどと考えてこれを拒んだりするため産褥の経過を悪くすることもあるが、餘り便秘することは宜しくない。下劑のあるときにも捨て置かず處置を受ける必要がある。

尿通も出産後は出難いことがある。これは出産のときに尿道を強く壓え付けられたためであることもあり、今まで大きくなつて居つた子宮で壓えて居つたものが、急に嵩が低くなり、腹壁も弛んだためにいきみの利き方が不充分であることもあり、その上に産褥では臥て居る位置のまま尿通をさせるために出難いこともある。臥位のまま尿通や便通し得ることは多少の練習が必要である。これは産後ばかりではなく、重い病氣のときなどにも必要なことがあるから、平生から稽古をして置くことは決して無益なことではない。止むを得ぬときには、

そのときの褥婦の状況によつて上體を起して排尿をさせることもあるが、器械を用いて排尿をすることが多い。然しなるべく自然の尿通を得たいと苦心するのである。

産褥の間の着類は、時候に應じて心地のよいようにすることを要する。餘り温過ぎることも、餘り寒過ぎることも宜しくない。肌衣は白色のものが汚れが目立つから最も宜しい。**夜具類**も着類と同様心地のよい程度に保温の目的を達すれば充分である。それ以上餘り重い着類、夜具は望ましくない。

入浴をするのは悪露も黄色になつて少くも二・三日を経た後、離床を許してから後である。長湯をせぬこと、餘り熱い湯に入らぬことは妊娠中と同じである。その上に入浴は正午の前後が望ましい。入浴の後には暫くの間安靜にして臥床するが宜しい。産後には身體の状況が

幾分か變つて居ることがあるから、用心をした方が過ちが少い。

家庭の仕事を取ることとは、例えば裁縫であるとか、庖厨の世話をするとか云うようなことも、床離れの後軽い動作から始めて産後約五・六週間を経てから後が望ましいことである。

新聞・雑誌を読んだり、**讀書**をすることも平易な記述のものは二・三週も経れば差支えはないが、なるべく強い喜怒哀楽などのような感じを惹き起さぬようにすることが望ましい。多人數の**集會**する場處などに參會することもなるべく長い間避けたいものである。**旅行**なども同様である。

軽い散歩のような外出は異常のない産褥の第五・六週を過ぎた後は差支えのないことが普通である。

家事

讀書

旅行

出産のときには胎児が子宮の袋の口から腫や、陰部の外までを押廣げて出て来るのであるから、その通過した部分には多少の傷が出来ることが普通である。その上子宮の中には胞衣の剥れた跡の大きな傷があるから、褥婦は大きな傷のある怪我人であると考えることが最も適當である。總ての傷は障りなく癒えるときまでも多少の痕を残すものであるが、子宮の中の胞衣の剥れた跡の傷は通例は自然の働きて妊娠前の状況のように癒えて行くが、袋の口のところや、その他の陰部の傷は多少の痕を残すものであつて、それが出産をしたことを後になつても知り得る證據になるのである。

外陰部の傷は出産のときに會陰保護と云うことを行つて、なるべくこれを避けるように用心をするのであるが、それでも猶ほ傷の出来ることがある。

これ等の傷は特別な手当をせずに自然に癒えさせることもあり、また状況に應じて處置をすることもある。殊に陰部の外側に出来た傷は

最も不潔になり易いから、それを清潔に保ち故障の起らぬように用心をするのである。

それにも拘らず稀には陰部の内外の傷に病氣を起す原因になる細菌が付いて繁殖して、様々の程度の、様々の容態の病氣を起すことがある。その中に産褥熱と稱えて居るものがある。

産褥熱

産褥熱と云うのは多くは高い熱があるから稱えたものであつて、その熱の昇る前に多くはさむけがあり、時によつてはふるいが来る。然し熱は相當に高くてもさむけやふるいのないこともある。この熱の出るのは傷に膿をもつたり、子宮の近傍に膿をもつたりするために起ることもあるが、それ等の膿んで居るところから膿や、その他の有害なものが全身に廻はるためであることもある。そのような容態になると子宮に近い部分ばかりでなく、遠く離れたところにも膿をもつことがあつて、そのために危篤な容態を起すことがあり、屢々生命を失うに

至ることがある。

これを防ぐためには妊娠中の養生をよくするのみならず、出産のときや産後にも病氣の元になる細菌が、陰部の傷のあるところへ入り込まぬように、様々の方面に注意をせねばならぬ。その細菌は産婦の身體にも、手當をする産婆や醫師の手にも、器械にも、綿や布片にも、また着類や夜具などにも付いて居らぬとは云ひ得ぬものであるから、各々適當した方法でそれを取除くことに骨折つて、出来るだけその危険を少くするように苦心して居るのである。

近來の醫師や産婆は白い布片や綿を贅澤に使用し、その上消毒薬などを濫用するように考えて居られる方が、今日でもまだ少からぬようであるが、産褥熱の危険を少くするためには止むを得ぬことである。然し産褥熱のようなものでも手數をかけて消毒の處置をした後には、安全に使うことは出来るのである。然しその處置は相當に面倒なものである。

消毒の方法は既に随分細かく研究せられて居るが、出産のときにこの方法を充分に行うことは中々に困難なものである。まだこれから研究せられ發達せねばならぬところが決して少くはないのである。

産褥熱と診定せられぬ場合でも、傷から起つた熱のある重症の病氣があつて、時には生命が危いこともあり、或は長い間續く病氣になることがある。それ故に出産のときや、出産前後の取扱い方には配慮を要することの多いものであるから、妊娠中から信用のある産婆や醫師の指圖を受けて養生法を守り、出産時にもその指圖の下に苦痛と闘うて出産を了り、産後の養生を充分にせねばならぬ。

産婆は妊娠中でも、出産時でも、産褥中でもない経過である場合には、その取扱をすることを許されて居るものであるが、異常の経過が起るであろうと考えられるか、それが起つたときには醫師の指圖を受けねば手當をしてはならぬことになつて居るものである。それ故に産婆が醫師の診察を受けることを勧めたときには、これに従われ

ることが必要である。そのために危険の大きい異常の起ることを防いだり、起つてからでも容易に危険から免れることが出来るものである。

産婆を選定してそれに依頼をせられるには、その學問や技術に優れて居ることは第一に大切であるが、猶ほ大切なことは親切で正しい判断の出来る人を選ぶことである。

醫師は前述の通りであると正常の妊娠分娩には必要はないかと考えられるようであり、世間でも時々誤解をする人があるが、妊娠・分娩・産褥の経過は女子の身體の状況から見れば病氣などのときにも、これに比べる程の變化は少い位の大きい變り方であり、従つて僅かの原因のために病氣になり易く、またある病氣は妊娠中に起り易いものもあれば、常に醫師の監視を受けることは望ましいことであり、妊娠・出産・産褥ともに異常の起つて來たときに醫師がその場に居れば、その兆候の起つたとき、又は極めて初期の間に手當をすることが出来る。

云ふ便利もあり、従つてその危害を少くすることが出来るものである。それ故に出産の際に異常はなくとも、醫師を招くことは不必要なことではない。産科専門の病院や産院などで出産をすることも同じ理由で自宅の出産よりは安心である。

それ等の容態の起ることを豫知し或は起つたことを知るために、産褥には定時に検温や検脈をする。然し總て熱の昇つたものが産褥熱であるとは限らぬ。發熱の原因になる疾病は産褥熱の他にも多數にあるから、それは醫師の診断によるより他はないのである。

世間では出産の後に續いて授乳して居ると、月経は續いて止まつて居ることが普通であると考えて居るが、實際は授乳の間に月経の再び始まるものが少くはない。その再び始まる時期は一定しては居らぬ。早いときには産後六・七週間の後に來ることがあり、遅いときには授乳して居る間は全くこれを見ぬこともある。授乳はどの位まで續けるが宜しいかは後に述べることにする。

検温・検脈

産後の月経

産後の障り

産褥には産褥熱の他にも様々の障りの起ることがある。悪露の下りることが妨げられて子宮の中に溜ることもあり、またそれが膿のようになることもある。また子宮や子宮の周囲に膿を持つこともあり、腹膜炎などを起すこともある。それ等はその病氣になつた部分や、その廣さなどによつて、容態にも差があり、危険の程度にも差がある。何れも適當な醫治を要するものである。

産褥には便秘するものが多いのであり、尿通も自然にはないことがあることは既に述べた。

妊娠中から腎臓の障りのあつたものは産褥になつて治ることが多いが、その中には急に治らぬものもある。然しこれを完全に治して置くことは、更に妊娠したときのために大切なことである。これを疎かにせられる方が少くはないようであるが危険の多いことである。

妊娠中から脚氣の容態のあつたものが、分娩中や産後に著しく悪くなることもある。時によつては妊娠中にはその容態の認められなかつ

たものが、出産後に著しい容態が出て來て時によつては腰の立たぬやうになることもある。

新産兒

新産兒の處置

生れて出た胎兒は産後數日して臍緒が全く落ちて、その跡の傷の癒るまでを**通例新産兒**と稱える。

入浴

生れて出た小兒は先づ臍緒を縛つて剪み切り、それから皮膚の脂垢(あぶらあか)を落して入浴をさせる。そのときには脂垢を落とすためには刺戟の少い油や、卵の白身などを用いて、先づそれを落し易くした後、刺戟の少い石鹼や、糠袋のようなもので脂氣を洗い落して、目や口は別に取つて置いた清水を軟い清潔な布片で洗い、身體を拭い乾して衣類を着せる。浴湯の温度は攝氏の三十八度以下のものが宜しい。この温度は普通成人が入浴して居る温度と比べれば随分低いものであ

るが、新産兒はこの位の湯に入れる方が宜しい。入浴の時間は長くても五分から七分位である。冬期でも特別に冷えた室でなければこの温度の湯に入れても決して風を引いたりすることはない。我國では成人の浴湯の温度が割合に高いために、新産兒にも四十度以上の温度の湯に入れて居ることは却つてよくないのである。その後は毎日一回位入浴させることが普通であるが、定まつたものではない。

着類

着類は肌着は勿論のこと、夜具なども白色のものは汚れ目が目立つから清潔を保つことの點から望ましいことであり、色染のものは染料のために皮膚を刺戟することがある。肌衣は軟かい木綿が宜しい。直接に皮膚に當るところえ毛織物などを用いれば時によつて刺戟を與えることがある。その他の着類でも同様であるが、皮膚を刺戟するとそれが濕疹などの原因になることもある。衣類は總て餘り締付けずに手足なども自由に動かせるようにするが宜しい。新産兒を小包郵便の包

襦褌

装をしたように動かれぬように縛つて置くことは望ましくない。襦褌(むつき)のようなものもなるべく脚の方を束縛せぬようにしたいものである。その點からは洋式の三角形のものの方が宜しいように思はれる。これも云うまでもなく白色の軟い木綿のものを望むのである。おしめカバーなどと稱えてゴム製の襦褌の外被が出来て居るが、僅かの時間だけの使用なれば大きな障りもあるまいが、絶えずこれを用いて居つて、排尿などがあるままに取換えることが遅れると、尿の分解作用などのために皮膚に刺戟を與えて、小兒の陰部や肛門の邊がただれたり、發疹したりすることがあるから、餘り推奨することの出来ぬものである。

尿通・便通

尿通や便通のあつたときにはなるべく直に襦褌を取換えるようにせねばならぬことは云うまでもない。それを怠るとただれや、發疹の出来ることのあるは今も述べた通りである。取換えるときには糞尿で汚

れた陰部や肛門のあたりを温い湯と軟い布片とでよく拭き清めた後に、新しい襦袢を當てるが宜しい。若しただれなどが出来る傾きがあつて、皮膚が赤くなつて居るようなときには刺戟の少い打粉（汗知らずや澱粉に藥劑を配合したものなど）を用いて置けば治ることもある。それでも猶ほ擴がるときには醫治を要する。

大便の度数は新産兒によつて差があるが、通例一日に二・三回位である。時によつては四・五回のこともある。一日中一回も排便がないときには多くは浣腸を行うが、醫師又は産婆に相談するが宜しい。糞便は始めは黒いように見えて少し綠色を帯びて粘つた便を排出する。これは**胎糞**と稱えて居る。それが二・三日位で次第に黄色の便になる。母乳で育てると通例は均等に黄金色であつて軟かく少し粘りがあるが、牛乳などで育てれば少し白色が強い。時によつて白い細かい粒を混じて居り、水分が幾分か多いことがある。若しそれが草色のような綠色を帯びて居るようなときや、鼻みずのような粘液を交えて居るときに

は、それが二・三回も續くときには醫師に相談するが宜しい。その時には多くは便を残して置いて醫師に見せる必要がある。大便の性質に注意することは、小兒の健康を保たせ、滞りなく成長させるためには大切なことである。

排尿の方は大抵一時間から二時間位に一回位の割合であつて、大體に云えば毎三時間から三時間半に一回の授乳をすれば、その都度とその中間に一回位の割合になる。大抵排尿のときには泣いて襦袢の濕うたことを告げるものである。

排便も排尿も生後四・五ヶ月の後には便器又は便所に於てさせることが出来る。それには母親の注意と苦心とを要するものである。これ等は將來によい習慣を付けるために、かなり大切なことであると考えられる。

新産兒が生れた後少しも排便がなかつたり、排尿がなかつたりすることがある。これは約一日もよく観察した後、醫師に相談するが宜し

5。

臍緒の残りが新産兒の臍に附着して居る部分は繃帯で包んで不潔にならぬように保護してあるが、それが次第に乾いて黒く、硬くなつて産後四・五日から十日頃までの間に臍のところから脱落する。時によつては何時までも濕つて居り、色も悪く、割合に軟かいことがあり、時によつては悪臭をさえ放つことがある。その時には早い内に手當をすることが必要である。

臍緒ばかりでなく臍の部分も周圍が赤くなり、膿や膿のような液などが出るようであれば、早い内に充分の手當をせぬと取返しが付かぬことを起すことがある。

臍緒の落ちた跡の臍のところは最初は極く少しの傷が見へることもあるが、二・三日位で癒えることが普通である。少し飛出して居るよりに見えることが屢々であるが、次第に引込んで行くものである。若

新産兒の外出

しその出臍になつて居るものが次第に大きくなつて來るか、何時までも引込まぬときには、その部分に脱腸を起したためであることもあるから、醫診を受けて適當な處置を必要とすることもある。

新産兒を屋外に出すことは何時頃からがよいかと云ふことは時候によつて差がある。冬季殊に寒い風の吹くときなどにはなるべく差控えるがよいが、晴天で、風がなく、割合に暖い日の日中であれば、産後第五・六週頃から後は十分や十五分時間であれば差支えない。夏季であれば餘り日光の直射せぬ木蔭などであれば、第三・四週頃から後であれば差支えない。これは略々東京附近の時候で述べたのであるから、土地を異にするに従うて多少の斟酌をせねばならぬ。世間で宮詣りと稱えて冬の時侯でも四・五週位より経過せぬ小兒を外出させることは危険が多いものである。然し成長するに従うてその時間も長くし、寒暑ともに堪え得られるように鍛鍊をせねばならぬことは云うまでも

空氣・日光・運動

ないから、その成長に従うて次第にその度を變えねばならぬ。また小兒の發育の如何もまた考慮して實行せぬと思わぬ障りを起すことがある。大體に云えば**新鮮な空氣**と**日光**とは**運動**と相俟つて小兒の成育上に大切なものであるから、殊に自然に與えられた空氣と日光との利用を怠つてはならぬ。**運動**の方は前にも着類のところでも述べた通りに小兒が自分に適するだけの運動をすることをなるべく妨げぬようにすることが大切である。襪履や着類を取換えるときや、入浴のときに束縛を解かれた小兒は喜んで活動することを見ても了解できることである。それ故に冬季でも煖室の設備のあるところや、日光の充分にさし込むようなところでは、着類の交換のときなどに一・二分時間も束縛を解いたままにして置いて、自由に運動させることは成育上によい結果を與えることである。

榮養

小兒の發育のために最も大切なものは**榮養**であることは云ふまでも

授乳

ない。生後約十時間位までは授乳をせぬことが普通であるが、それから後は適當な時期を考へて**授乳**を始める。

最初は一回に五瓦位しか吞まぬから、まだ分泌の盛になつて居らぬ乳腺から出る乳汁だけでも足りるものである。その頃の乳汁は殆んど全部が初乳(あらちち)である。それから約二時間半乃至三時間位に一回づつ授乳するのであるが、次第に一回の分量が増す。大抵はそれに應じて分泌する量が増して來るようになり、成分も初乳が減じて乳汁が多くなる。早くて二週の後、遅ければ四週の後位には全く乳汁のみになる。この初乳は前にも述べた通り鹽類を多く含んで居るばかりでなく、新産兒の榮養に必要な成分を適當に含んで居つて、殊に今まで胞衣の方から榮養を取つて居つたものが、口から榮養を取るようになる移り行きの時期に最も適切な成分と作用とを持つものである。それ故に生れたすぐ後には殊に母乳が新産兒の榮養のためには最も大切なものであつて、同じ人乳であつても乳母の乳などよりも一層有利なもの

授乳の時間

のである。このことは殊によく理會して貰いたいものである。

授乳の時間は最初には二時間半から三時間位に一回を常とするが、次第にその間を長くして三時間乃至四時間位に一回にし、夜間にはその度数を少くし、殊に就寝中にはこれを延ばすようにする。一回に呑む乳の分量は次第に増量して一回に百瓦以上に達するものである。乳腺はその必要に應じて分泌するのであるが、時によつては分泌の少いこともあり、また分泌の量は相當に多くても哺乳する量が多いため不足することもある。若し乳汁の不足するときには牛乳や乳製品などを用いることもある。

牛乳と乳製品

乳母

牛乳や乳製品はその質を選ばないと小兒に適合せぬことがある。これ等のものも近年は次第に良い品が出来ては居るが、用い方もそれぞれ異なるから、その用いるものによつて、その時々調べねばならぬ。小兒の榮養のためには、牛乳やその製品よりは人乳の方が優つて居ることは誰にも理會し易いことであるが、母乳の足りぬときに**乳母**を

求めることも容易ではない。そのときには乳の分量や性質ばかりでなく、乳母の健全であるか否かも調べねばならぬ。その上に氣質なども不適當であつてはならぬから、中々その要求に適するものを得ることは困難である。醫師に乳の性質や身體の健康診断を受ける以外には、乳母の小兒が生きて居るならば、その小兒を見ることは大きな参考になることがある。

授乳前の注意

授乳の前後には、乳首のところを清水でよく拭うが宜しい。乳首は大切に保護して傷などの出来ぬようにせねばならぬ。若し擦りむけたり、裂けたりしたときには、すぐに手當を受けた方が安全である。それが元になつて乳腺の膿むことがある。授乳の時間を不規律にするとは食事の時間を亂したり間食をすると同じように、小兒の消化の障りを起し易く、成長を妨げることが多いから、特に氣を付けねばならぬ。

睡眠

小兒は充分に乳を吸うて満腹すれば大抵眠りに入るものである。次の哺乳のときまでにはよく眠るものであるが、多分その真中くらゐのときに、尿通などのために一度眼を醒して啼く位で、その外は眠り続ける。世間で「よく眠る兒は丈夫」と云うのは正しいことである。授乳のときが来たならば二・三分位は啼かせて置いた後に哺乳させる。この叫ぶことも小兒に取つては運動の一つであり、殊に深い呼吸をすることが役に立つと思われる。授乳の時間の中間には少し位啼いてもそれは通常は空腹のためではないことが多い。尿通か便通のためであるか、それに伴う腹痛などのためが多い。それ故に授乳時間でないときに啼いたならば襁褓を調べて見て、汚れて居るときにはそれを取換えてやれば靜かに眠りに入るものであるが、猶ほそれでも啼くときにはその原因を調べて見ることを要する。

小兒の發育のためには栄養と清潔と温保とが大切であるが、餘り哺

温保

乳の量が多過ぎても障りのあることがあるが、乳呑兒では多くの場合にその懸念は少いものである。清潔の大切なことは入浴や、兩便の通じた跡始末などのみならず、着類や襁褓の清潔は最も大切である。温保のことは兎角温過ぎる傾きが多いのである。時候も、居室も考えねばならぬが、着類や夜具の厚過ぎることが屢々見受けられる。そのために冬的时候に汗疹が出来たことなどもある。餘り薄着させて風を引かせてはならぬが、餘り重ね着に過ぎることも望ましくない。

小兒の發育の良否

小兒が順序よく發育して居ることを知るには、その成長して行く様子を見て居つても充分ではあるが、小兒が安らかに眠り、定時に哺乳し、兩便の通じも、度数からも、性質からも、分量からも異常がないようであるならば心配はないのであるが、始めの中は毎日か二・三日に一回、後には一・二週乃至一ヶ月に一回位體重を測つて見ることは成長する度合を知るために便利なことである。

小兒は生れた後三・四日位は體重の減ずるものが多いが、それから次第に増して、生後十日位から遅くも十五日位までの間に生れたときの體重に復して、それから後は次第に増すものである。稀には始めから一度も減量せずに増す一方のものもある。發育のよい小兒には減量が少く、發育の不十分な小兒には減量も多く、減量の期間も長いことが普通である。健康に發達した場合には大抵生後四ヶ月の終りには生れたときの約二倍、一ケ年の後には約三倍の體重になることが普通である。それ故に最初は毎日の増量が四・五十瓦又はそれ以上であることもあるが、次第にその毎日の増量は少くなる。

小兒に乳を吞ませて居る時期は普通には約十ヶ月から一年位の間である。第七・八ヶ月の頃には多くは乳齒が發生する。それは小兒の消化器が次第に發達して固形食を取る準備に進んで居ることを示すものであるから、その頃になつたならばおもゆなどを與え試みて、便通に

乳齒

乳離れ

注意してその消化の良否を見ることが大切である。それで障りがなくば數日の後に飯粒を數粒加え、それを數日續けて障りなくば飯粒の量を増すと云うように、漸次に進めて行く。それと同時に軽い輕焼や、ウェファアのような菓子も試みると云う風に漸進して行き、次第に軽い消化し易い副食物などを加えて行くようにする。それは小兒のために必要な乳離れをさせる準備である。全く母乳を離すことは發育の状況や、上述の食物を用いた成績にもよるが大抵十ヶ月位から後である。我國ではそれ以上長い時間母乳を用いる習慣が行われて居るが、これは母親の健康の上から見ても、小兒の健康の上から見ても利益のないことであり、母親の身體からは不必要な消耗をさせ、小兒の方ではその次第に發育した程度から見ても、既に餘り役に立たぬものを飲んで居るのであるから、これは斷然止めるようにした方が宜しいのである。

授乳中に次の妊娠の起ることがあるが、そのときには離乳をせねば

ならぬが、それは躊躇してはならぬ。乳兒の榮養の方法は乳母か、牛乳か、乳製品かによつて養うようにせねばならぬ。

飢餓熱又は渴熱

猶ほ新産兒にその出生の翌日か、その次の日位に體温の上ることがある。これは他に原因のあることもあるが、所謂飢餓熱又は渴熱と稱えて居るものであることが多い。これは新産兒が水分を取ることが少い上に、水分を失うことが多いためであるとか、最初の一・二日は哺乳の分量が少いために起るのであると云うのであるが、まだその原因は充分明かしてはないが餘り心配にならぬことが多い。然し他の原因であるときには心配せねばならぬこともあるから醫診を求めめる方が安全である。

黃疸

その他新産兒に黃疸の起ることがある。これも約七・八割位の小兒に起るものであつて、多くは危険のないものであつて、一週内外で次第に退いて行くものであるが、同時に熱があつたり、機嫌が悪かつた

り、皮膚などの黄色も次第に強くなるようであれば危険の多いことがあるから、これも醫師の診察を受けることを要する。

妊娠し得る年齢

要するに妊娠は健康な結婚生活に在る女子には當然來るべきものであるが、その妊娠し得る年齢は略々月經初潮のときから月經の終絶するときまでの期間である。妊娠の経過は順調であれば何等心配すべきことなく出産のときに及び、出産のときも順調であれば痛みも感じたり、勞作をせねばならぬが、故障なく経過すべきものであり、産後とも同じことである。

然し妊娠中には一粒の卵子から約十ヶ月の間に身長五十種、體重三千瓦に達する胎兒が成育し、そのために母體の方に受ける變化は著しいものであり、かなり重い疾病のときにも比すべきものであり、従つて様々の異常状態を起し易いものであることは前にも述べた通りである。それ故に妊娠の経過をなをざりにせず監視を求めたり、少して

も異常と思われることがあつたときには、捨て置かぬようにすることは必要である。

出産のときには胎児を送り出すために陣痛と腹壓との労作をせねばならず、胎児が骨盤の中を通つて外界に生れ出るには、その大きさが殆んど裕りのない位の窮屈なところを通らねばならぬのであり、その間には少くとも小さな裂け傷くらいは免れぬのであり、胞衣の剝れた跡は全面が傷になるのである。それ故に出産の後の有様は何等の著しい異常のなかつたときでも**大きな怪我人**である。

これ等を考へて見れば妊娠・出産は生理的のものであるには相違ないが、病氣と同じように考へて用心せねばならぬものであり、褥婦は怪我人として取扱わねばならぬものである。殊に産後には**新産児の養育**をせねばならぬのであるから、そのためにも母親は自分の**身體の器官**によつて小児の**榮養**に必要な乳を作り上げて供給せねばならぬのである。

授乳の期間は約一ケ年にも及びその間は母親は自分のみの健康を維持するばかりでなく、小児の健康殊にその**榮養**のために力を分たねばならぬものであつて、前後を通算すれば受胎の後約二ケ年の間は直接に小児の發育のために自分一人の上に猶ほ小児のために餘分の働きをせねばならぬものである。

それ等の働きが母としての女子に與えられて居る大切な天職であることを考えれば、その仕組の誠に巧妙であることに驚かずには居られぬ。この點から考へても世の母たり、母たるべき女子が、その健康を保つて、子孫の健康と繁榮のために努められることを、個人の健康のためと、強健なる國民を育て上げるために切に希望して止まぬのである。

婦人病

婦人病
婦人科

婦人病と稱えて居るものは主にも婦人性器の疾病である。それを取扱つて居る専門科を婦人科と稱えて居るのである。

婦人病のことを知るには婦人性器の位置や、その構成や作用などを知つて居らねば、充分に理會し難いものであるが、それ等の基礎になることを充分に知ることがまた容易なことではないから、その各々の場合に必要に應じて簡略に述べることにする。

世間では婦人病は女子の性生活をなして居る間にのみ起るものであつて、小供の間や、老人になつてからは勿論のこと、配偶者のない女子などには起らぬものであるかの如くに考へて居る人もあるので、そのために時々間違ひの出来ることもあると思はれる。然し實際には幼

婦人病の診察を受けるには

い女兒から高年の女子にまで、その配偶の有無や、性生活の有無を問はずに起ることのあるものであるから、その點に就いては誤解のないやうにしたいものである。

猶ほ、その他に婦人科の診察を受けることは耻かしいと云うような感じから診察を受けることを躊躇せられて、病氣によつては治療の時機を失うものが少くはないが、前にも述べた通り如何なる年齢でも、性生活の有無などを問はずに起るものであるから、その點に就いての心配を去り、只何れの國の風習にても陰部を露出することを耻じないところはないのであるが、その耻かしいと云ふ感じだけを取り除いて、容態があれば速かに診察を求められるようにしたいものである。診察をする醫師の方では、陰部の診察も他の部分即ち耳・鼻・咽喉などの診察をすると、少しも差のない感じてあるから、耻かしく感ぜられるであらうと云ふ心持が少なくなつて居る。そのために時によつては診察

を受ける人に對して氣の毒であつたと思ふやうなこともあり得るのである。その位であるから心配せず躊躇せずに、容態があつたらすぐに診療を受けられることを勧めたい。

今一つは、病状やその他の容態を話されるときには、何事も残りなく、遠慮なく自分の感ぜられるままに話されることが肝要である。結婚生活や性生活に關係したことなどは遠慮して話されることがあり、結婚や妊娠に關係したこと、配偶者や自分が花柳病に罹つたことなども時によつては事實を話されることがある。これ等は時によつて診断の誤を來す原因になることもあるから、遠慮せずに心配せずに事實を話されるが宜しい。

婦人病の容態

婦人病の容態としては月經の不順や、その前後の苦痛・出血・色々の性質の下り物、下腹や腰の痛みや張る感じなどが多いようである。その他には頭痛、不眠、肩の凝り、動悸、息切れ、食事の進まぬこと、

嘔氣、便秘、尿通の近いこと、そのときの痛みなどもある。その他にのぼせ、疲労、しびれ、むくみ、腫れた感じ、身體のだるいことなどを告げる方もある。性感の弱い方や、性交時の痛みなどを訴える方もあり、人々様々の容態がある。それ等の容態には本人の告げられることを聞いて始めて知ることの出来るものが少くはない。それ故に打明けて容態を話されることはそれ等の容態に對してそれぞれ必要に應じて適當な手當をするためには大切なことである。

月經は約一ヶ月に一回反復して起つて來るものであることは誰も知つて居ることである。その初めて來る年齢は人々によつて差があるが、我國では略々數え年の十五・六歳位のときである。然し本人の發育の狀態や、その土地の狀況・氣候、又は環境の狀況などによつて差がある。時によつては十歳前後から始まることもあり、二十歳位になつてから始まることもある。

月經
初潮

周期

月經が一度始まれば定まつて間隔を置いて繰返して來ることが普通であるが、時によつては一・二度見たきりで一・二ヶ月以上二・三年も中絶して再び始まつて來ることもある。

月經と月經との間隔も多くは二十七・八日から三十日位までの間であるが、それも短いことがあり、長いこともある。その間隔が規則正しく同じ日取で順調に反復して來ることが通例であるが、これも不順であることがある。

續く日數

一回の月經の續く日數も各人によつて差があるが、多くは三乃至五日位である。それよりも短いこともあるが長いこともある。七日・十日以上にもなるときには異常があることが多いものである。

一回の月經に出血する分量も亦人々によつて差がある。今日までの調査では百瓦内外と思われるが、ある人は二百瓦以上であると云うて居る。

分量

この出血は受胎した卵が宿るには都合のよいやうに子宮の中に準備

の出來て居つたものが、その必要がなくなつたために子宮の中の薄い膜に出血が起つて、そのためにその膜が剝れて排出せられるときに、子宮の中に出血した血液が流れて出るのである。若し受胎した卵が子宮の中に宿つて、準備して置かれた變化が役に立てばこの出血は起らないのである。

子宮の受胎卵を宿す準備は排卵のある少し前から漸次に用意せられるものである。排卵の時期は月經の前十二日から十六日までの五日間である。この排卵のときには軽い下腹の痛みを覺へる人もある。これを中間痛と稱えて居る。

月經のときに出る血液は通例は凝まつて居らず、色は黒ずんで居つて鮮かな赤い色ではない。若しこれが固まりがあつたり、鮮かな色であつたときには異常のあることが多い。

月經のときにはその二・三日も前から様々の容態を覺える人が多い。その程度は様々であり、その容態も書き並べ兼ねる位に多様であるが、

性質

月經時の容態

最も多いものは頭痛、めまい、下腹や腰の痛みや、張るような感じ、肩の凝り、だるく感じるようなことが多い。その他にも食事が進まず、嘔気などのあることもある。下腹や腰の痛みの強いときには床に就かねばならぬことがある。

月經の二・三日前からそのような容態のあることが多いが、時によつては月經が始まつてから二・三日の間そのような苦痛のある人もある。稀には月經の終る頃或は終つた後に容態のある人もある。

月經時の容態はかなり多數の婦人にあるから、その軽いものは月經に伴うて起る止むを得ぬ容態であるとして、通例は特別に處置を受けぬ人が多いのである。實際にも極く軽い容態のときには心配するような異常のないことが普通である。然し理論上から云えば月經のときも何等著しい苦痛のないのが健全であるので、故障のあるものは多少とも異常があると見るのが正當であると思われる。

月經と性器

月經の初めて現はれたことは、性器の發達が次第に完成に近づいて、妊娠が可能になつたことを示す信號であると考えて宜しい。その後は妊娠したとき、授乳して居るときの外は、定期に繰返して來るのである。然しときによつては他の疾病のために月經の止まることがある。

重い病氣のとき、或はその恢復期などに多い。その他には結核性の病氣や、貧血などのときに月經の止まることがある。また稀には強い精神の刺戟、例えば非常な驚きや悲みなどのために月經のある途中でも急に止まることがある。それと同じく異常な身體の勞作のために月經が止まつたり、或は反對に強くなつたり、長く續いたりすることがある。或は子宮や卵巢などの變化の結果として、月經の強くなつたり、少量になつたりすることもある。

それ故に月經のすぐ前から月經中にはなるべく精神上にも身體上にも劇動を避けるようにすることは大切であり、殊に少しでも容態を伴うような人は一層攝生に注意することが必要である。

月經時の攝生

月經時には子宮内から出血があるために、時によつて外部から病原菌が入り込んで性器の病氣を起し易いから、その前から終るまでは絶えず外陰部の清潔に氣を付けねばならぬ。殊に陰部の中の方を洗つたり、或は出血を吸取らせるために紙や綿などを挿込んだりすることは危険が甚だ多いから、單に外の方を洗うことや、外部に綿殊に消毒済のものを當てて置くことが安全である。月經のときに挿入した綿の残つたために重い病氣を起した例もあるから特に注意せねばならぬ。

子宮その他の性器の病氣に罹つて居る人は月經の前後には殊に安靜に注意することを要するものである。

月經の終絶

月經は大凡五十歳前後までは續くものであるが、これも各人によつて大きな差がある。或人は四十歳前後又はそれ以前に終絶し、或人は五十歳以上までも續くことがあるが四十七・八歳位で止まることも多い。通例は月經の終絶することは妊娠の可能性のなくなつたこと

更年期

を示すものであるが、それ以後に妊娠した例も稀にはある。

月經の全く止む少し前からその後まで約二・三年位の時期に様々の容態を訴える人がある。それは更年期の容態と稱えて、人によつて輕重と長短の差はあるが、かなり多數の婦人に起るものである。その容態は甚だしく多様であるが、主なもの頭痛があり、めまいがあり、安眠が出来ず、さむけ、のぼせ、熱の出た感じや、汗が出たり、しびれがあり、肩が凝り、身體のアチコチに痛みがあり、張り・筋張り・釣るなどと云う感じがあり、食事が進まず、嘔氣があり、多くは便秘し、時によつては氣鬱になり、感動し易くなると云うようなものである。その他にはとても數え切れぬ位の様々の容態がある。これ等の容態は子宮や卵巢の働きが次第に弱くなつて、遂に止まつて來るためとそれに伴うて他の器官の働きにも變化が起るために様々の容態を起して來るものである。誰にても理會し易いと思はれるのは、月經の終絶する前の頃になると次第に肥滿する人がある。これも卵巢などの働き

月經の異常

が次第に變つて來るために起る容態の一つであるが、これを見てもその年齢の頃に婦人の體質に著しい變化の起るものであることが理會せられるのである。

稀には月經が一生の間全くない人もあり、極めて長い期間に僅かな度數であつたり、その分量や、間隔の差の甚だしい人などもある。これ等は屢々子宮の發育不全や、卵巢の作用の調子を失うて居るためであつたり、また前にも述べた病氣などによることもある。これ等は醫診によつてその原因を明かにすることが出来ることが通例である。このようなときに妊娠が可能であるか否かはその原因などとの關係で考へねばならぬから、無月經であるから妊娠は不能であると云うように單純には定められぬ。最近にも生來一度も月經を見なかつた女子が結婚して妊娠した實例が報道せられて居る。

月經の出血量が少な過ぎたり、多過ぎたり、繰返して來る期間が不規則であつたり、月經に伴う容態が強かつたりするときには醫診を受

月經以外の出血

けて必要があれば治療を加えるが宜しい。俗間療法などを行つて他の危害を起してはならぬ。

月經以外の出血は子宮口に生じた單純なただれから來るようなものは生命に關わる程の危険はないが、若し癌腫などのためであればなるべく早く診察を受けて適當な治療を受けねばならぬから、出血の分量は少くとも一日も早く診察を受けるようにせねばならぬ。

出血のあるときに血の塊まつたものが出るようなときには、それを取り集めて置いて醫師に見せるが宜しい。例えば流産などのときにその完全に濟んだか否かを知るために便利である。

痛み

痛みのあるときにはその痛みのある場所を明かにすることは云うまでもないが、その痛みが時々起るか、引續いて痛んで居るか、痛みが針か錐のようなものを刺すようであるか、ツキン／＼と脈を打つようにうづくようであるか、張るか、釣るか、稲光りでもするようにピツ

ピツと走るようであるか、さし込んで来るか、だるく痛いか、また痛みのあるところが表面であると感ずるか、深いところであると感ずるか、と云うようなことを明かにすることは病氣の診断の上に大切である。また痛みが月經の前であるとか後であるとか、その出血のある初めの一日であるとか、二・三日であるとか、食事の前であるとか、後であるとか、身體を動かしたときか、その前であるか、その後であるかと云うようなことは何れも診断を付けるために大切なことがある。

痛みは時によつてその病氣のある場所でないところに感ずることもある。例えば子宮外妊娠のときに烈しい容態が起つたときには下腹に劇しい痛みを覺えることが多いが、時によつては下腹は手で觸れねば格別の痛みを感ぜずに、胃部(胸先)に強いさし込むような痛みを覺えて、その痛みは氣の遠くなる程劇しいこともある。

その他にはその痛みが何時から起つたかをも話さねばならぬ。すべての容態はその容態が何時頃から始まつたか、次第に強くなつたか、

腫れ物

さしひきがあるかを話すことは時によつて診断の助になることがある。腫れ物を心付いたときでも、何時始めて心付いたか、次第に大きくなつたか、急に大きくなつたか、その後小さくなつたか、痛みを伴うて居るか痛みはないか、その他の容態を伴わぬかと云うようなことを明かに話す必要がある。

すべて容態は出来るだけ細かく自分で見たまま、感じたままを述べて醫師の診断を求めると宜しい。

性生活に關した容態

性生活に關係した容態では各人から聞取ることや、その人に説明をすることは差支えはないが、このような著述では述べることを好まぬことが多いから餘り深くは立ち入らぬが、性器の病氣のために起る性生活の障りも少くはない。例えば新婚後に性生活の不能であるような場合にも、醫治によつて癒るべきものが少くはない。また性感に關係したのも性器の病氣や故障に基いて居るものが少くはなく、その

體質

中には醫療によつて治るものが少くはないのである。

多數の人の集まつて居るところを見ても太つた人もあり、瘦せた人もある。肥えた人が瘦せようと思つても容易くは瘦せぬ。瘦せた人が太ろうと思つても容易には太らぬと云う事實を見るのである。その外にも人々によつて様々の状態がある。これ等の差異の起ることは何に基くかと云うことは中々調べ難いものである。殊にこの點に於ては女子には妊娠と云ふ大切な職分があるために男子と全く同様には考えられぬから、女子の**體質**に就いては特に研究を要するものであつて、近頃その方面の研究は著しく進歩して來た。

人體には男女ともに皮膚には汗や脂が出る。これは汗腺や、皮脂腺から分泌するものである。その他には食物の消化のためには口中には唾腺の分泌があり、胃には胃液、腸には腸液の分泌があり、猶ほ肝臓から胆汁、脾臓から脾液と云うようなものも分泌して居るのであるが、

内分泌腺

性腺

その外に猶ほ**内分泌腺**と稱えて居るものがある。その中でも多くの人が知つて居るものは男子の**睪丸**、女子の**卵巢**などである。これは特に**性腺**と稱えて居つて、男女に於て各々異なつたものである。その他に脾臓であるとか、頸の前面に在る**甲状腺**であるとか、脳髓の中に在る**腦下垂體**その他のものもある。これ等の各々の働きに就いては詳しいことは述べぬが、これ等の**内分泌腺**と稱えられて居るものの働きは人體に取つて大切なものであつて、その一つ或は多數のもの働きの故障があれば、様々の健康上の支障を起して病氣になる虞れのあるものであり、その故障が甚だしいときには生命に關することもあると云われて居る。その故障は働きの過剰になることもあり、また不足になることもある。この働きの故障がなく良い釣合を保つて居るときには小兒のときの發育もよく、成人して後も健全である。それが釣合を失うときには、その度合に應じて小兒のときにでも成人した後にでも様々の程度の障りが起るものである。

卵巢の内分泌

内分泌腺の中に加えられて居るものの中で男女の間に差のあるものは性腺である。即ち卵巢は男子にはないのであり、睾丸は女子にはないのである。女子の卵巢は内分泌腺であるばかりでなく、人類繁殖の根源になる卵子の生育せられる場所である。卵巢の内分泌も以前は一種の分泌であると考えて居つたものであるが、今日では一種ではないことが明かになつて來た。今日ではまだ内分泌に關することは研究の途中に在るから、將來には次第に考えが變つて來るかも知れぬが、性器の發育や、女子の女らしく發達することなどの本源は、主にも卵巢の内分泌に在るものと考えられて居る。妊娠の持續することも矢張り卵巢の一部分の内分泌の力によると考えられて居る。流産するものの中でも、殊に引續いて流産する所謂習慣流産などの中にはこの内分泌の働きが不充分なためであると考えられるものもあつて、その方面から治療を試みることもある。然し習慣流産のすべてがこの原因から起るものであると云うわけではない。

内分泌の腺はその間に互に關係のあるものが多いから、それ等の關係を精細に研究することは容易なことではないので、今日でも猶ほ研究せられて居つて、次第にその働きや相互の關係が明かになつて來ると思われる。

この内分泌腺の働きが體質には最も大きな影響を與えるものであるには相違ないが、その研究せられた結果を診斷上や治療上に應用するにもまた様々の困難があるので、次第にこれを應用する傾向になつては來て居るがまだ完全ではない。

臓器療法と稱えられ或はホルモン療法などと稱えられて居る治療法の大部分はこの學説を治療上に應用して居るものである。

性器の發育異常

婦人性器の病氣のことを話す前に先づ性器の發育異常のことを述べ

臓器療法
ホルモン療法

性器の發育異常

外陰の發育不全

る。
婦人性器の發育異常はその原因の加わつた時期と、その原因の加わり方によつて様々であつて、その詳細を述べても理會し難いから、成人になつてから後に割合に多く見るものの二・三を述べる。

無毛症

性器の發育の中でも**外陰の發育が不全**なことがある。その中でも世人の多く心配せられるものはその外観の整うて居らぬこと、殊に陰毛の少い場合である。外陰の發育の不足なときには屢々内部の性器にも發育の不足を伴うて居ることがあるが、必ずしも外に見えるところと同じ程度ではない。それ故に**無毛症**とでも云うべき状況であつても、月經もあり、妊娠も遂げ得られる場合が少くはない。

鎖陰

鎖陰と稱えて外陰は普通に發育して居るが、發育不全であつて、内性器の入口の鎖されて居ることがある。この場合には只入口のみが閉されて内部は尋常に發育して居ることもあり、内部までも閉されて居

造陰術

つて、子宮や、卵巣や、卵管までも發育不全であり、或はこれ等も殆んど全く發育をして居らぬことがある。入口のみが閉されて居るものは云うまでもなく**醫療の效**があり、妊娠などにも障りのないようになることもあり、内性器の發育如何によつて様々の苦痛の伴う場合にその苦痛は取り除かれるが、妊娠の目的などは達し得ぬことがある。
鎖陰の場合に全く容態のないこともあり、或は時々殊に毎月一回位定期に下腹に痛みを感じて、その痛みは随分強いことがある。この痛みのあるときには内性器の發育は普通であるか、少しく不充分であるかの場合が多い。

鎖陰のときには性交は出来ぬことが普通であるが、時によつて不満足な性交に満足して全く心付かずに居ることがある。
鎖陰のときに内性器の殆んど全く發育して居らぬときにも手術によつて腔腔を造ることが出来る。然しこの場合には妊娠し得ぬことが普通である。たゞ性交のために腔を造るのみである。それ故に現に結婚

生活に在る婦人にのみ希望によつて行はれる手術である。

腔
瘻

腔の入口は閉ざされては居らず、傷や、腫れ物はないが、性交の時又はその他の場合に腔の入口に觸れるときに強い痛みを覚えることがあり、そのために性交の不能であることがある。これは腔瘻と稱えて居るもので、多くは醫療によつて治療することが出来る。通例この障りは新婚の當時に心付くものであるから、耻かしいと、心配とのために憂鬱になり、そのために思わぬ結果を來すものであるから、近親の人たちはそれ等の點にも注意を要する。

發育の不全であるためや、病氣その他の結果によつて腔の内部が狭いことがある。その中には手術又はその他の方法によつてこれを擴げ得られるものもある。

それ等の他に出産のときに腔の内部や外陰に傷が出來て、それを縫合せたり、或は自然に癒した場合に以前よりも著しく狭くなることも

子宮の發育不全

ある。これも亦醫療によつて治すことが出来る。
腔の内部の全部又は一部分に互つて、殆んどその中央に仕切が出來て、腔が二つの管になつて居ることがある。これも醫療にて切り離して一つの管にすることが出来る。

子宮の發育不全にも殆んど全く子宮の存在を認め得られぬ位の程度のものから普通の子宮よりも少し小さい位の程度のものまであり、その程度によつて容態にも差がある。著しいものは月經であつて、高度の發育不全であれば月經の全くないことが普通である。發育不全の程度の極めて少ないものでは月經は殆んど普通位ある。然し月經の分量によつて發育の不全である程度を定めることは出來ぬものである。發育不全の程度は餘り強くなくても月經を見ぬこともある。また妊娠に關してもただ發育程度ばかりからでは決定し兼ねることがある。かなり強い發育の不全であると認めた場合でも妊娠することがあるから、

その他の發育異常

發育不全が著しく高度でない限りは妊娠不能の決定をすることは出来ぬものである。時々子宮の發育不全の診断を受けて失望する人もあるが、その程度によつては醫療によつて月經の來潮するようになることもあり妊娠も可能になることがあるから決して絶望すべきではない。稀れにあるものでは子宮が全く二つに分れて居つたり、或は一つにはなつて居るが、内部で二つに分れて居つたりすることもある。その一方に妊娠したり、双方に妊娠したりすることもある。時によつてはその發育程度の如何によつては胎兒の生長とともに様々の容態を起して來ることがあり醫療を要することがある。また二つに分れて一方はよく發育し、一方は發育の悪いこともある。

發育の完全な子宮でも不完全なときでも、何等かの原因によつて子宮の口が閉ざされて居るときには、月經のときの出血が子宮の中に溜つて痛みを起すことがあり、殊に通例月經のある時期に強い痛みを覺えることがある。これも醫療を必要とするものである。

卵巢の發育不全

卵巢の發育不全もその程度が様々である。卵巢の發育の不全が強ければ卵子の發育も出来ぬから不妊であり、その上卵巢の内分泌の働きが不充分であるから、そのための容態を起すことがある。その程度によつては卵子の生長も出来、妊娠も出来る。

卵管の發育不全

卵管の發育不全のときには卵巢の發育不全を伴うて居ることが多いが、若し卵子は生長して受精し得たときに卵管の發育が悪くて、その管腔が狭いとすれば子宮外妊娠が起り得るものである。

性器の發育不全はその全部が同じ位の程度であることもあるが、必ずしもその程度は常に同じ割合であると云うことは出来ぬ。それ故に外陰の發育は不全でも、内性器の發育は尋常であることがある。その反對に内性器の發育は不全でも、外陰の發育状況には少しも異常のないこともある。

月經異常と性器の發育異常
性感の異常と性器の發育異常

月經の強弱や、順調であるか否かの如きも必ずしも性器の發育の状況と程度を同じくして居るものではない。また性感の強弱なども性器の發育程度を知る標準にはならぬのである。然し世間では無毛症であるとか、性感が弱いとか、月經の不順殊に減少して居るときなどには直に妊娠不能であると決定する傾きがあるが、これは必ず妊娠不能と断定することは出来ぬものである。

外陰にしても陰にしても、子宮・卵巢・卵管にしてもその發育の著しく悪いものでは醫療の效を奏せぬことが多いが、程度の軽いものは屢々その效を奏することがあり、殊に年齢の若いもの程結果がよいのである。臟器療法その他の藥用をしたりするときには内服と注射とに關せず長く續けて用いたり、反復して用いたりすることを要するのが普通である。攝生の方法も同じように長い時日の間怠らずにそれを守る必要がある。かなり忍耐して治療や養生を續けねば効果のないことが常である。

外陰の病氣

外陰の病氣

尿道口

外陰炎

外陰と云ふのは陰部の外側の部分で陰の入口よりも外の部分である。そこには尿道の出口がある。

尿道の出口にも小さなただれや、腫物の出来ることがあり、そのために尿通のときに痛みを感じることもある。

外陰の腫れることがあるが、通例は陰と同時に起るものである。そのときには腫れて、痛みがあり、赤くなり、多くは膿が出る。或はその部分に深いただれの出来ることもある。淋疾のために起るものは成人には少く幼児に多い。

外陰の腫物が出来て膿を持つて、痛みもあり、熱の出ることもある。時によつて切開をせねばならぬことがある。

それ等の病氣の中に淋疾から起るものがある。その病毒が眼に移れ

外陰の癢痒症

ば盲目になることがあるから、その病毒に觸つた器具や、布片類や、手指などを自分や、その他の人々の眼に觸れぬように注意することが大切である。また女の兒の陰部にも觸れぬようにせねば今述べたように腫れや痛みを起したりすることがある。

外陰の癢痒症と稱えて外陰やその周囲の強いかゆみを覺え殊に床に就いて後身體が温まつて來れば一層堪え難く、時としては眠りを妨げて憂鬱になることがある。その原因には全く神經性のものと種々の刺戟のために起るものとある。

原因の明かになつたときにはその原因を取除いて、局所の治療を行う他に榮養やその他の全身療法を行うのであり、エックス線を應用することももある。このときも局所を清潔に保つことが必要である。

外陰の強いかゆみがあると共に外陰の次第に萎縮して來るものがある。これは時によつて局所を切取らねばならぬこともある。

外陰にただれの出來ることがある。これも多くは陰内からの下り物

ただれ

象皮病

雞冠のような發し物

などのためであるから、内部の治療の他に外部を清潔にして散布薬などを用いることを要する。若しそのようなただれが次第に廣がり、或は深くに入り込む傾きがあれば捨て置かずになるべく早く治療を受けねばならぬ。

この序に上腿と外陰との界のところ即ち腿の付け根の邊りに皮膚のただれが出來ることがある。多くは肥満した汗の多い人などに出來るのである。そのときにも清潔にすることと、乾かして置くことが大切であるから打粉などを用いる。それでも治らぬときには醫療を受けねばならぬ。

外陰には**象皮病**と稱えて皮膚が硬くなつて瘤のようなものがあることがある。多くは兩側の陰脣の部分から出來る。多くは切除することを要する。

雞の頭冠のような形をした發し物が外陰の皮膚に出來ることがある。これも陰からの下り物の刺戟から生じるものであり、殊に淋疾のとき

瘤

に多い。然し淋疾でないときにもある。妊娠中には出来易いものであつて、かなり速かに廣がるものであるから、早期に治療を要する。時としては患部を切り取らねばならぬこともある。

その他にも各種の瘤が出来ることがあるが、稀に癌腫や肉腫が出来る。何れも始めは自分で感じる容態が格別劇しくないから捨て置くことが多い。これは前に述べた外陰のかゆみがあつて萎縮するようなものから變化して來ることもある。それ故に容態の格別なことのない間に確實な診断を受けて、充分な治療を受けねばならぬ。

腔の病氣

腔炎

腔炎は種々の細菌のために起ることが多い。痛みやかゆみ、を覺えたり、時には腫れた感じや、熱をもつこともある。下り物は黄ばんだものや、膿のようなものが著しく増し、時には血を混ずることもある。

その他には猩紅熱・痘瘡・はしか・コレラ・チブスなどのときに特に心付かぬ間に腔炎を起すことがあつて、甚だしいときにはただれが出來て、稀にはその癒るときに腔の癒着を起すことがある。猶ほ腔内に綿や紙などを挿入してその全部又は一部が残つたために腔炎を起すこともある。子宮の病氣のあるときに子宮からの下り物のために起ることもあり、藥劑の濫用によつても起ることがある。更年期以後の老人に起ることもある。その容態は何れも殆んど同じようであり、主なもの容態は下り物の増すことである。老人に起るものは僅かな血液を混じることもある。

これは素人療法で腔を洗う位のことでは全治し難いものであり、腔を洗うこともその必要のないときに濫用することを慎まねばならぬから、醫治を受けることが安全である。然し時によつてはその治療には相當長い時日を要することがある。

猶ほ特に注意を要するものは**女兒に見るところの腔炎**である。これ

女兒腔炎

は屢々外陰炎と膣炎とが同時に起るものであつて、その原因は淋疾菌の傳染によるものが多く、両親やその外小供の世話をして居る人に淋疾に罹つて居る人があるときに起つて來ることがある。

幼い女兒の皮膚や粘膜はそのような傳染が起ると、それを喰止める力が甚だ弱いから容易に播がるものである。その上治療をするにも様様の困難があつて、時によつては容易に治り難いものであり、殊に病氣が深く子宮の方や、卵管の方にまで擴がれば一層治療し難くなり、稀には腹膜炎などまでも起す危険がある。

幼兒期の膣炎から子宮や卵管の病氣を起したときには、成人してから後に不妊である原因を残すことがあるから、女兒の外陰膣炎のときには早い時期にその治療を充分に受けて病氣の進行せぬ間に全治を期することが肝要である。

負傷

膣には様々の負傷をすることがあり、稀には性交のための傷が出来ることがある。新婚の當時に膣口に軽い傷の出来ることもある。粗暴

な性交殊に強姦によつて様々の傷が出来ることがある。その他には妊娠調節や、墮胎の目的で器具その他のものを用いて傷が出来ることがあり、その場合には傷の大きさや、場處やその他の關係によつて大きな危険を來すことがある。出産のときには膣にも多少の傷が出来ることが通例である。

何れの部分の傷でも浅く、小さく、その上に傳染の危険さえなくば自然に治癒することもあるが、多くは適當した處置を要し、それにも拘らず様々の危険な容態や治療し難い容態を起すことがないとは云えぬ。

若しも傷が膀胱をも破つて居れば尿瘻が出来て尿が膣内から絶えず出るようになり、腸を破れば糞瘻が出来て大便が膣内から出るようになることがある。尿瘻や、糞瘻は手術によつてそれを閉ざすことを試みるのであるが、時によつて手術が困難を極めることがある。尿瘻や糞瘻は出産のときの傷や手術のためにも起ることがある。

瘤

腔にも種々の瘤が出来ることがある。癌腫や肉腫や、液體の内容である囊腫などである。何れも醫治を要し、殊に手術を要するものが多い。

子宮の病氣

子宮の位置

子宮の疾病に就いては先づその位置異常から述べることにして、その**正常の位置**のことから説明する。

子宮の形は大體から云えば茄子のような形をして大きさは約雞卵大位であつて、少し前後に平らになつて居る。それが種々の組織で支えられて骨盤の管の中に少しばかり前屈になつて前の方へ傾いて保たれて居るものである。それ故に子宮の**正常の位置**は軽い前屈と前傾とになつて居るものである。

異常位置

この位置から見て異つた位置を取つて居るときにはそれを**異常の位置**

子宮後屈

と考へるのである。それ故に前屈にしても、前傾にしてもその度が強くなれば異常と見做すものであり、後の方へ屈んだり、倒れたりしたものは後屈又は後傾であり、右の方や、左の方へ傾いたものは右傾や左傾であり、全部が右へ偏つたり、左へ偏つたりして居るものは右偏又は左偏であり、前又は後へ偏つたものは前偏又は後偏である。その他に子宮の下つて来る子宮脱と云うものもあり、正常の位置より高く上るものもある。

その中で世人の多く知つて居るものは**後屈**である。これは最も多數に見るものであり、その影響も様々の方面に在るために醫治を行うことの多いためであらう。然し前屈にしても様々の容態を起して醫治を要することがあるのであり、その他の異常位置でもそれを正しい位置にすることによつて容態を取去り健康を恢復し得る場合が少くはないのである。

子宮後屈と後傾とは多くは同時にこれを見るものである。その原因

として最も多いのは出産の後に子宮が舊態に復するとき、子宮を支えて居る組織が子宮の重みを支えきれずに、その重みのために後方え倒れたようになることから起るものであり、即ち子宮を支えて居る組織が弛んで充分妊娠以前のように子宮を支えきれぬためである。

その他の原因は様々であるが既に妊娠せぬ前、或は小兒のときから位置異常のあることもある。

子宮後屈や、後傾の容態は様々であり、その上その度合も大きな差がある。ある人は全く容態はなく、或人は多様な容態を訴えることがある。その容態の二・三を挙げて見れば、月經の量や持續日数の増すことが多い。その他には便通の障りがあり、月經の前後に痛みのあることもあり、便秘や痔疾の起ることがあり、尿通の方にも障りがあつて尿意が近くなつたり、甚だしいときには尿が出ぬようになることもある。その他には下腹や、腰や、上腿の方にだるい感じや、重い感じや、張る感じや、痛みや、釣れることがあり、じびれたような感じな

どがあり、一般には所謂神経質の傾きになり、頭痛や、頭の重いことや、その他アチラ、コチラの神経痛や、ロイマチス様の痛みがあり、食事も進まず、嘔氣があつたり、動悸や、息切れがするようなこともある。それ等の容態の輕重の度合は様々であるが、それが全部位置異常に基くものであるか否かは容易に決定は出来ぬが、位置異常の治療の效を奏すると同時に、或はその後多少の時日を経て、それ等の容態が全くなくなるを見れば、その多數のものは子宮の位置異常に基くものであると考えられるのである。

殊に妊娠能力の減ずることは子宮位置異常の一つの容態である。然し後屈子宮のある婦人が全く妊娠せぬのではなく、中には多産の人もある。然し廣く調査して見れば子宮後屈のある婦人で結婚生活に在るものには受胎率が著しく少く、その位置異常を治療した後にはその率の増すことを見ても、この位置異常のために妊娠能力の減ずることは確かである。

子宮の位置異常の中には卵管や、卵巢の病氣又はその他の骨盤内の様々の病氣のために起るものが少くはない。これ等は云うまでもなく位置異常の容態の他に猶ほそれ等の病氣の容態をも伴うことがある。

子宮の位置異常の治療は主として手術療法であるが、殆んど心配するような危険のない手術であるから、手術を勧められたときには速かに決心をするが宜しい。時によつては手術のときの必要から開腹をすることももあるが、その場合でも格別心配する程の危険はないのが通例である。若し同時に他の疾病を伴うて居るか、或は産褥の初期に見出した場合などには手術によらぬ療法を試みて、それが成效せぬときに適当な時期に手術を行うことがある。

強い前屈

子宮後屈・後傾以外の位置異常の中で強い前屈のある場合には屢々強い神経性の容態を伴い、殊に月経痛などの強いこともあり、受胎能力の不充分であることもある。これも時によつて手術療法を行うこともあるが、手術療法ばかりではその成績が思わしからぬことがあるか

子宮脱

ら、場合によつて手術を行わぬこともある。

子宮脱も大多数の場合に手術療法によつてこれを治さねばならぬ。手術を行うことの出来ぬときには輪のようになり或は他の形をした器械を用いてその下つて来ることを防ぐことがある。後屈や後傾のときにも同様のことを試みることがある。殊に産後の極く初めに位置の異常を認めたときにこの器具を用いることで稀に正位に戻すことに成功することがある。然しこの器具を用いて支えて居る間は、醫師の示す養生法を守り、その指圖に従うて監督を受ける必要がある。數週・數月に互つてこの器具を用いたまま捨置くときには取り返しのかかぬ結果が起ることがある。

子宮内膜炎

子宮内膜炎と云ふ病氣は今日では世間でもよく知られて居る位であつて、婦人病の大部分を占めて居ると思われるのであるが、今日醫學上から内膜炎と稱えるべき部分は餘程少くなつて、今まで内膜炎と稱

慢性子宮症

えられて来た大部分は慢性子宮症と稱えるが適當であると云われて居る。然し日常には未だ子宮内膜炎と云うて居る場合が多い。

然し各人が感じる容態の上からこれ等を區別することは殆んど出来ぬのである。その容態の主なものには月經の異常と帶下の増すとである。

月經の異常としては多くはその量も日數も増し、時々是不正な出血になり、月經時の痛みさえも伴うことがある。下り物の方も増し、時には黄色であつて膿のように見えることもある。

その他には腰や下腹の痛みがあつたり、重い感じがあつたり、頭重や、頭痛、その外の神経症狀を起すことがあり、食事が進まず、嘔氣があつたり、便秘したりすることもある。

他の婦人性器の病氣でもこれ等の容態があるものであつて、容態の上からばかりでは診断を付け難いもので、診察によつて始めてそれを區別し得るのである。

然し慢性子宮症の外に子宮内膜炎のあることは事實であり、また少くはないのである。殊に淋疾菌に基くものやその他の細菌によつて起るものがあり、産後には産褥子宮内膜炎もある。

子宮内膜炎は急劇にその容態を現わすときと、その容態の徐々に起つて來るときがあり、その容態の重さも様々の程度である。

急に容態の起つたときには屢々體温が上り、頭痛や、身體のだるいことを感じて、床に就かねばならぬことがあるが、徐々に起るときには不快の感じはあるが、就床せねばならぬ程でないことがある。然しその位でも安靜に就床する方が治癒の速かて、完全であることが多いから、安靜を守ることが要する。その他には下り物の多いときには外陰を清潔にすることが外陰炎などを防ぐために必要であるから、外陰を清潔に洗うことを要する場合がある。腫を洗うことは醫師の指圖によらねば濫用をしてはならぬ。

子宮内膜炎でも子宮慢性症でも幸いに割合に短時間で全治すること

もあるが、その経過の長びくことが多いために醫療を怠つて一層経過を長くすることがある。然し怠らずに治療を續ければ全治するものである。

治療の方法としては薬用の他に薬液の塗布や、洗滌などを用いたり、手術的の處置をしたり、或は罨法や、坐浴や、電氣療法、光線療法などを用いることがある。子宮の不正出血などのあるときには脾臓や、頭蓋内にエックス線を用いることもある。

子宮頸管カタル

子宮頸管カタルと云うのは子宮の入口の僅かな部分だけの病氣で、原因は内膜炎と同じである。淋疾菌で起る場合が多いが、子宮の位置異常に伴うて起つたり、性生活を営んだことのない處女にも體質などによつて起ることがあり、常に性病に基くものであるとは云えぬ。容態は主もに下り物が増すことであり、殊にそれが粘り氣が強いことが多い。その他に下腹や腰の邊に不快の感じや、痛みなども覚え、

全身にも神経性の容態があることもある。

この病氣のときには子宮の入口の周圍に小さな粟粒位から小豆位までの大きさの粘液を充して居る腫れ物が出来ることがあり、それが出来れば下腹や腰の邊に感じる容態の募ることもある。

また子宮の入口から大きな赤色の米粒位から小豆位の大きさ、時としてはそれよりも猶ほ少し大きい細い莖のある瘤が出来ることもある。これが出来れば時々不正な出血がある。

子宮頸管カタルのときには屢々子宮の入口の附近にただれが出来ることがあり、それからも不正に出血することがある。

それ等のただれや、小さな腫物などは不正な出血があるために癌腫ではないかと心配せられることがあり、時によつては單に視たり觸れたりした診察のみでは區別し兼ねることがあつて、その疑わしい部分の組織の小片を切り取つて顯微鏡検査を行つた後に癌腫であるか否かを定めることもある。

頸管カタルの治療も多くは随分長時日を要するものであり、時にはその状況によつて手術療法をも行わねばならぬことがある。小さな腫れ物などは幾度も繰返して細い刀の先きで破つて、その内容を除かねばならぬことがある。莖のある小さな瘤は矢張り切り取るのであるが、多くの場合には入院などせずとも取り得られることがある。

子宮の發育の不充分なものは既に述べたが、年頃になるまでには充分に發育し、その後には妊娠したこともあるものが、子宮が通常よりも小さく縮むことがある。これは**子宮萎縮症**と稱える。

子宮の萎縮は種々の病氣の結果として來ることもある。それは多くは慢性の病氣で榮養の方に障りを起すような病氣のときであるが、その他には子宮や卵巢の重症の炎症殊に産褥熱などの後に來ることもある。最も多いのは流産・早産や正期産の後に子宮の收りをよくする薬剤を餘り長く、或は大量に用いたりするために起ることもある。また

子宮萎縮症

乳を吞ませて居るために起ることもある。これは産後數ヶ月の後に起ることもあるが、多くは離乳すべき時期を超えて餘り長く授乳して居るようなときに起り易い。その結果として稀に妊娠し得ぬこともある。その他には病氣でなくて起るものは更年期以後即ち約五十歳前後から後に起るものであつて、これは當然のことである。然しその年齢より以前に既に萎縮を始めることもある。

子宮萎縮のときの主要な容態は月經が少くなつたり、或はなくなることである。それとともに更年期に起る容態が多少伴うことが多い。

更年期より後に起る子宮萎縮はそれに他の容態が伴わねば正常のことであるから、特に治療の必要はないが、その他の原因から來るものはその原因になつて居る病氣を治すことに力を盡したり、必要があれば授乳を止めたり、全身の榮養を高めるようにして、運動も努めさせることが必要である。その他に猶ほ藥用をしたり、婦人科の治療を行わねばならぬこともある。

子宮の瘤

子宮筋腫

子宮に最も多く出来る瘤は**子宮筋腫**と**子宮癌腫**とである。

子宮筋腫の出来る原因はまだ明かにはなつて居らぬが、最も多くその出来たことを心付くのは三十歳位から後である。未婚の婦人よりは既婚の婦人に多く、妊娠の度数の多かつたものよりも妊娠したことのない人か、一・二回ぐらい妊娠した人に多い。

子宮はその本来の大切な働きの上から主にも筋肉から出来て居るものであるが、その筋肉が或る部分に於て特に多く塊まつて發育するものではなく、血管の管を組立てて居る筋肉が異常に盛に發育して瘤になるものであると考えられて居る。然しその瘤の全部が筋肉から成立つて居るのではなく、**結締織**と稱える**纖維**もその成立に與かつて居る。その筋肉の方が主であるか、**纖維**の方が主であるかによつて**筋腫**と稱

えられ、或は**纖維腫**と稱えられ、或は**纖維筋腫**と稱えられる。然しその決定は瘤の組織を檢查してから後でなければ出来ぬものである。それ故に普通手術前の診断では子宮筋腫と云うことを定めるだけである。

その他に筋腫の中にもその性質によつて學問上からは種々の區別をするものである。その中には組織が融けたようになって軟かになつて居るものもあり、液體を内容にして居る囊のようなものになつて居るものなどがある。そのようなときには**卵巢囊腫**と區別することがむづかしい。

筋腫はその出来場所や發育の仕方の關係や大きさによつて容態にも治療上にも種々の差がある。その出来場所から云えば子宮の外側に出來たもの、内側に出來たもの、その中間のところに出來たものとあり、その外側や内側に出來たものにも瓜などのように細い莖があつて子宮と續いて居るものや、平らに膨れ上つて瘤になつて居るものなどがある。

大きさは小さなものは普通の診察の方法では在るか、ないかを定められぬ程小さいものから、大人の頭位の大きさ、またはその以上のものもある。大體には毬のように球状であるが、時によつてはデコボコのあることもあり、二つ以上の球が一塊りになつて居ることもある。

主もな容態は月經の多くなることや、月經以外の不正出血や、月經痛などであるが、瘤が大きくなればその周圍との關係によつて、周圍の部分を押え付けて色々の容態を起すことがある。便通の障り殊に便秘や、痔疾などを起したり、尿通の方にも障りを起すことがあり、それが月經時には強くなることもある。また出血の多いときにはそのため貧血を起してこれに伴うて起る容態もあり、屢々心臓にも障りを起すことがある。

然しそれ等の容態も瘤の大きさばかりの關係で強い弱いが定まるのではなく、小さな瘤でも容態が重くて強いものもあり、大きくても存外容態の軽いものがある。

何れにしてもこの瘤のあるときには適當な治療を要するものであることは云うまでもないが、その治療法は多くは手術療法である。稀には簡単なもので通院治療で手術を受け得られるようなこともあるが、多くは入院して手術を受けねばならぬ。その手術も出來場所と出來方や大きさなどの關係で腫の方から手術を受けることの出来ることもあるが、多くは腹壁を開いて所謂開腹術によつて瘤を取り去るのである。そのときに瘤だけをエグリ取つて跡を縫つて置くような方法を取ることもあるが、時によつては子宮の一部分を、ある時にはその全部を取り去らねばならぬことがある。このような手術は随分手の込んだ手術ではあるが、今日ではその成績が著しくよくなつて、不幸な経過を取るようなものは甚だ少なくなつたのである。三・四十年前の状況と比べて見れば誠に著しい進歩である。

然しこの頃では子宮筋腫に對してはエックス線療法を行うて好結果を得ることがあるので、それを用いることが多くなつた。エックス線

療法は筋腫の或る種類のものに對しては效能があるが、或る種類のものに對しては殆んど全く効果のないことがあるから、その決定は醫師の診察の結果によらねばならぬ。時によつては手術を受けることを無暗に恐れて、醫師の意見に反してエックス線を受けて、そのために相當長い時間を過して、その間にも出血が續いて居つたために貧血なども加わり、手術を困難にしたような實例もあるから、すべて手術などを受けるべき病氣や、瘤のあるときには、信頼する醫師の意見に従つて手術を受けるや否やを決定することが最も得策である。

以前には子宮筋腫の一種と考へて居つたが、その後の研究で別種のものも考へられて居るものに**子宮腺筋症**と稱えられるものがある。これも月経が多量になり、多くは強い月経痛を伴い、不正出血もある。これはエックス線療法は無効なことを常として、手術療法によつて治すより他に途はないのである。

子宮腺筋症

子宮癌

その他に子宮に屢々見ることのあるものは**子宮癌腫**である。子宮癌は難治の病氣であるには相違ないが、今日では治療の方法が進歩したために全治する場合が次第に多くなつて來たのである。

子宮癌にも出來場所によつて區別するが、大體に云えば子宮の口元即ち子宮頸と稱えて居る部分に出來るものと、子宮の奥の方即ち子宮體と稱えて居る部分に出來るものとの二つに區別する。何れも四十歳前後よりも後に出來ることが多いものであるが、稀には二十歳前後で既に癌腫を起したものもある。

子宮頸部の癌腫は出産を何回も經過した婦人に多いと云われて居るが、一度も出産せぬ婦人や、結婚せぬ婦人にも來ることがある。體の癌腫は出産したことのない婦人に多いと云われて居るが、數回出産した婦人に來ることもある。

癌腫の原因は猶ほ明かではないが、出産する度に子宮の口元に傷が出來たりしたその結果として起るものであると云う考へを持つ人もあ

るが、多産の婦人に必ず起ると云うわけではなく、まだ何のために起ると云うことは全く明瞭にはなつて居らぬ。遺傳のあるかないかに就いても世間では遺傳するもののように考えて居る人が多いようであるが、まだ今日では確かなことは決定せられて居らぬ。

子宮癌の容態の最も早く現われて来るものは下り物の増すことであるがその時代には心付かぬ人が多く、大抵は下り物に血が混るか、出血があるかに驚かされて診察を受けるのである。その初めて不正な出血が少量にてもあつたときにすぐに醫師を訪えば多くの場合には治療の届く見込があるが、多くはそのような容態が重ねて起つてから診察を受けるために治療が充分に遂げ得られぬことも出来るのである。

その出血或は血の交つた下り物のあるのは、何も心付くような原因なしに起ることもあるが、時によつては秘結した便通を強くいきむて排出した後であるとか、性交の後であるとかに來ることが多いものである。然しそれ等の出血があつたときには必ず癌腫であるとは限らぬ

のであつて、他の原因から出來ただれなどからの出血もあり、また子宮内膜炎や、慢性子宮症やその他の場合にも出血することがあるから、どこから出血したかは醫師の診察の結果によらねば定められぬ。

その様な場合に醫師は眼で視たり、指で觸れて診察をした結果で、癌腫の有無を決定するのであるが、そのみで決定することが出來ぬときには、疑わしいと考えられる部分の組織の小部分を切り或は掻き取つて、それを更に處置して顯微鏡検査をして決定をすることがある。癌腫の容態は出血や下り物ばかりではない。下腹や腰の痛みもあることがある、下り物に臭氣のあることもある。初期のものであつて下腹や、腰の痛みや張るものは多くは同時に他の病氣があつて起ることが多い。癌のみのために下腹などの痛みや、下り物の臭氣のあるものは多くは病勢の進んだものである。

今日の**癌腫の治療**は手術療法が主なものである。近年エックス線療法やラヂウム療法も次第に進んで來たためにこれを用いることもあ